

# 南メソヂスト監督教会日本伝道の初穂、鈴木愿太げんたの生涯

—宣教師ランバス一家との関わりを中心に—

## 池田 裕子

### I はじめに

### II 鈴木愿太の生涯

- 1 生い立ち
- 2 中国でのランバス一家との出会い
- 3 瀬戸内伝道
- 4 アメリカ留学
- 5 関西学院普通学部教授
- 6 『河北新報』かほく主筆
- 7 仙台美以教会（現・仙台五橋教会いつつはし）
- 8 詩人サトウハチローとの関係
- 9 晩年

### III おわりに



（写真提供：河北新報社）

## I はじめに

南メソヂスト監督教会「日本伝道の初穂」<sup>①</sup>として知られる鈴木愿太については、『神戸栄光教会七十年史』や『南美宣教五十年史』、『日本キリスト教歴史大事典』等に紹介されているが、関西学院の歴史の中ではあまり顧みられることがなかった。『関西学院百年史』は、鈴木が南メソヂスト監督教会初の改宗者であること<sup>②</sup>、関西学院の日本人教師として最初に教員免許状を取得した人物であること<sup>③</sup>は指摘しているが、関西学院の設立母体である南メソヂスト監督教会の日本伝道開始に当たって、宣教師ランバス一家が上海から連れて来た通訳が鈴木であったことには触れていない。

そこで、通訳としての鈴木 of 役割と共に埋もれてしまった事実を掘り起こすため、本稿ではその生涯に光を当てたい。関西学院の創立者一家の最も身近にいた日本人の視線を借りて、南メソヂスト監督教会の日本伝道と関西学院創立初期の歴史を見つめ直すことが本稿執筆のねらいである。<sup>④</sup>

## II 鈴木愿太の生涯

### 1 生い立ち

鈴木愿太は、一八六六（慶応二）年九月九日、父春山（一八二〇—一九六）、母登和の次男として、仙台で生まれた。<sup>⑤</sup>出生年に関しては、六五（慶応元）年とする資料もあるが、本稿では、学院史

編纂室所蔵の九五(明治二八)年一〇月付けの本人履歴書の記載を採用した。<sup>(6)</sup>父春山(本姓笹木氏、名は諱、字は忠誨、道察と称した)は、桃生郡鹿又村(河南町)の生まれで、幼時から学を好み、仙台に出て河野杏庵、石田道隆に医学を、僧南山、油井牧山に詩文を学んだ。やがて、仙台の医家鈴木怡安の養子となって医業を継いだ。明治維新後、居を一時、本吉郡気仙沼(気仙沼市)に移し、山水を友として遊んだが、その名を聞いて教えを請う者が多かった。そのようなことから、春山は仙台に戻り、青年たちの教育に当たるようになった。多くの文人墨客と会し、詩稿も数百巻に及ぶ。<sup>(7)</sup>愿太はそんな父のもとに、兄惇(通称午三、一八六〇―一九二八)に次いで生を受けたのであった。父の跡を継いだ兄は、評判の良い内科医になり、宮城病院附属医学校教授として生理学、薬物学を教えたこともあった。<sup>(8)</sup>

前述の履歴書によると、愿太は、一八七四(明治七)年から七八(明治二一)年まで仙台の北六番丁四番小学校(七六〔明治九〕年より木町通に移って培根小学校、現・仙台市立木町通小学校)に在籍している。学制が發布され、宮城県に小学校ができたのは七三(明治六)年であるから、愿太は草創期の小学校に通ったことになる。開校当初の混乱振りは、『明朝より午前八時に登校すべし』とお達し。サーテ、今までの時間は一ツ刻、二ツ刻ですから、この午前八時がわからない。誰に聞いても、サレバサー何刻にあたるかなあと言うような事で……<sup>(9)</sup>といった具合で、<sup>(10)</sup>「士分の子弟は袴を着け、短刀か木刀を腰に差して登校した」時代だった。<sup>(11)</sup>

その後、一八七九(明治一二)年に進学した宮城中学校(現在の仙台第一高等学校の始まりとされる宮城尋常中学校の前身)は、名称や設置者の変更はあったものの、七四(明治七)年一二月八日開校の宮城外国語学校から続く学校と見なされている。<sup>(12)</sup>その名の通り、体操以外は全

て英語で行われる程度の高い中学校であった。しかし、愿太の入学した頃から、英語中学科と英語変則中学科でも従来通りの英書中心の授業だけでなく、和漢学も教えるようになった。また、八〇（明治一三）年一月には、国語をもって授業を行う邦語中学科も設置された。愿太は英書を中心とする科で学んでいたと思われるが、八一（明治一四）年になると、英語科と新しくできた邦語科を統合しようという動きが起こり、その結果、優秀な英語教師二名が辞表を提出するに至った。辞表を提出した教師は生徒たちに慕われていたため、それをきっかけに生徒たちが校長退陣を要求してストライキに入るという同盟休校事件に発展した。<sup>(13)</sup>全校生徒二二〇名中一一八名が、十一月五日の夜、宮町東照宮内に集まった。行動を共にしなかった二人は、宮城県大書記官の息子と県学務課長の息子であった。この二人に情報が漏れないよう、生徒たちは事を慎重に進めたのである。密談の結果、一一八名は十一月七日付けで宮城県令（現・県知事）宛てに退校願いを、校長宛に辞職要求を突きつけた。結局、校長以下全職員が辞職し郷里に帰ったため、学校には二生徒しか残らず、宮城中学校は事実上廃滅に帰した。<sup>(14)</sup>事件を起こした一一八名の中に愿太の名があるとの確認はできていないが、この出来事を機に、愿太も宮城中学校を去った可能性が高い。<sup>(15)</sup>

現在では、「同盟休校」という言葉は耳慣れないが、昭和の半ば頃までの教育史には時折登場する。その元祖は、一八七九（明治一二）年に、開校二年目の司法省法学校でフランス人教員の暴慢を不服として、後の内閣総理大臣原敬が首謀した騒動であった。この時は原を含め、半数以上の学生が退学した。恐らく愿太も一役買ったと考えられる宮城中学校での同盟休校事件は、それに次ぐものとして、宮城県の教育史に記録されている。<sup>(16)</sup>

翌年四月、新校長のもと、退学者の大半は無条件で復校したが、愿太は戻らなかった。

一八八一（明治一四）年から八四（明治一七）年まで、仙台で漢学と数学を学んだと前述の履歴書に記されている。しかし、これからは漢学より英語が必要との父の勧めを受け、東京に出て、東京英和学校（現・青山学院）に入学したのであった。<sup>(17)</sup>

愿太が学んだ東京英和学校は、築地にあった東京英学校が、横浜にあった美会神学校と合同して青山の地に移転し、一八八三（明治一六）年九月に開校した米国メソヂスト監督教会経営の学校である。<sup>(18)</sup> 当時の様子について、開校三カ月後に入学した一年生が後年、次のように語っている。<sup>(19)</sup> 「建物は四、五棟の教師館が散在している広い地所の中に、鋸形の極くお粗末な二階造りの寄宿舍が西北に稍片寄ってぼつんと建っていた。寄宿舍の他には別に建てられた講堂教室もなく、皆此寄宿舍の室を用ひて授業をしていた。特に講堂が食堂と兼用であったことなどは珍妙の一つであろう。寄宿舍は神学生も普通科生も一所であったが、教室は神学生の方が人数も少なく、且つ室も足りないせいもあったであろうが、大抵は各教師の宅に行つて教授を受けた」。

東京英和学校における愿太の記録としては、『青山学院校友会会員名簿』（一九六三年版）の東京英和学校予備学科一八八四（明治一七）年（五名）の中にその名が見られるものの、八三（明治一六）年から九三（明治二六年）までの神学部、高等普通学部、予備学部の卒業生氏名の中には見当らない。<sup>(20)</sup> 愿太自身は、在学中のことを『青山学院校友会会報』に次のように書いている。<sup>(21)</sup> 「小生は明治十七年頃在学せしものにして、マクレー老校長が髯の生へた花嫁を迎へられし当時より<sup>(22)</sup> 候或時同盟休校を企て一時退学を命ぜられしも、再び入校更に一年余も在学致し候」。ここでも愿太は学友たちと共謀し、授業ボイコットを企て、退学処分を受けたようだ。仙台時代に同様の経験を持つと推測される愿太が首謀者であったのかも知れない。いずれにせよ、正義感の強い、

好奇心旺盛な性格だったと考えられる。これらのことから、愿太の正確な入学時期、在籍期間を特定することはできないが、東京英和学校に二年ほど在籍し、英語を学んだけれど卒業はしなかったと考えて差し支えないであろう。<sup>(23)</sup>

退学処分を受けるほど血氣盛んで行動力あふれる愿太が、当時、朝鮮半島をめぐる日本と対立関係にあった清国に強い関心を抱くようになったのは無理からぬことであつた。<sup>(24)</sup> 愿太は学校を辞め上海に渡る決心をする。そんな愿太の前途を氣遣つてくれたのは東京英和学校のうら若き女性宣教師ヴェール(J. S. Veal)であつた。中国で活躍する南メソヂスト監督教会宣教師ランバス(W. Lambuth、以下老ランバス)を尊敬していたヴェールは、上海に着いたら必ず老ランバスを訪問するよう念を押し、紹介状を持たせ、涙ながらに愿太を見送つたのだつた。<sup>(25)</sup>

## 2 中国でのランバス一家との出会い<sup>(26)</sup>

一八八五(明治一八)年秋、上海に渡つた愿太は、英国人ダラスの学校に入り、英語と中国語の習得に励みつつ商売を学び、何とか立身の緒を掴もうと奔走した。<sup>(27)</sup> しかし、若さにまかせて日本を飛び出したものの、次第に行き詰まりを感じるようになっていった。そこで、やつと親切なヴェールからもらつていた紹介状のことを思い出し、老ランバスを訪ねてみる氣になつたのである。上海到着から半年近くが経つていた。

記念すべき初訪問は一八八六(明治一九)年二月だつたと愿太は記述している。<sup>(28)</sup> それは老ランバスにとって、実にタイミングの良い、願つてもない出会いであつた。数カ月前に日本を視察し、新たな伝道地としてその可能性を本国の伝道局に報告していた老ランバスは、ちょうどその頃、

息子のウォルター (Walter、以下若ランバス) と連名で、中国伝道の辞任願いを伝道局に提出していたのである。<sup>(29)</sup>「色々話したいことがあるから、これからちよくちよく訪ねてほしい」との申し出を老ランバスから受け、初会見は終わった。愿太は英語と中国語を学ぶ日本人であった。春山の息子として、漢学の素養も十分にあった。<sup>(30)</sup>老ランバスは、若い愿太が信頼に足る人物であることを一目で見抜いたものと思われる。

一方の愿太が受けた老ランバスの第一印象は「聖者」であった。「詰襟チョッキ付きの黒い法服を着け宛然ウエークフィールドのヴィカー<sup>(31)</sup>を見るが如き感」を受けた。「総てに物静かな沈黙勝の人で、断えず両眼をパチクリするクセを持って居た」<sup>(32)</sup>。その時同席していた、流暢に英語を話す洋装・長髪の中国人青年マーシャル (C. K. Marshall) の存在に刺激を受けたことも愿太は記している。

この出会いは、愿太にとっても人生の大きな転機となった。愿太は少なくとも週に二度は老ランバスを訪ねるようになった。訪問の都度、老ランバスに日本語を教え、夫人のメアリー (Mary) から英語を習った。東京英和学校に二年間在籍しながら受洗するまでに至らなかったキリスト教の話も、自然に受け入れられるようになって行った。本人の言を借りれば、「いつしか私の心に落付が付き、人生に対する考え方も違つて来、時とすると一種の靈感に打たれてきて吾知らず頭を垂れて感謝の涙に呉る、事もあった」。東京英和学校で退学処分を受け、ヴェールに行く末を案じさせた若者が、老ランバス夫妻の愛情のもと、精神的に成長して行く様が想像される。

やがて、愿太は当時北京にいた若ランバスとも知り合い、二人の間には、「死を以てしても猶、断つ可らざる情誼をもつて結ばれたり」<sup>(33)</sup>と言えるほどの固い絆が生まれた。後に南メソヂスト監

督教会最初の宣教師団の一員として来日することになるデュークス (O. A. Dukes) にも紹介された。

五月中旬、いつものようにメアリーによる英語の授業が終わって帰ろうとした時、愿太は老ランバスに呼び止められ、書斎に招き入れられた。<sup>(34)</sup>そこで、南メソヂスト監督教会が神戸を拠点に日本伝道を開始することになったことを告げられた。日本人の知人が一人もいないので一緒に行って助けてもらえないかと頼まれたのだ。さらに続けて老ランバスは、特別な目的のないまま上海に留まっても決して愿太のためにならないことを説き、「よく祈り、よく考へて返事をして呉れ」と言った。ランバス父子は四月に、中国担当のマクティアー (H. N. McTyiere) 監督から日本伝道開始(七月一日付)の任命を受けていたのだった。<sup>(35)</sup>

次に会った時、愿太は日本に同行する決心を告げた。それから、出発に向けて慌ただしい日々が続いた。一八八六(明治一九)年七月二五日、南メソヂスト監督教会最初の宣教師団として、老ランバス夫妻とその娘ノラ (Nora)、デュークスとその婚約者ベネット (M. I. Bennett) 嬢、それに中国人少女二人と共に、愿太は神戸港に到着した。<sup>(36)</sup>船代を自弁した愿太は、宣教師一行とは別の三等船客であった。

### 3、瀬戸内伝道

南メソヂスト監督教会宣教師団の来神当初の住居については二説ある。『関西学院百年史』によると、ランバス一家の最初の住まいは、鯉川筋西側のデイヴィジョン・ストリート (Division Street) <sup>(37)</sup>であった。しかし、その他の文献は居留地四七番としている。宣教師団と共に来神した



愿太自身は、「神戸には既に居留地四十七番館を借家してあった」と書いている<sup>(38)</sup>。既に借りてあった家が最初に住んだ家であると断定することはできないが、南北戦争で敗北したため資金不足だった南メソヂスト監督教会が、最初から二軒の家を用意できたとは考えにくいので、既に借りてあった居留地四七番にまずは落ち着いたと考えるのが自然ではないだろうか。

来日直後の愿太にはやるべきことが山ほどあった。通訳、警察や県や市との交渉、使用人の雇い入れ、必要品の買い出し等、愿太は休む間もなく働いた。<sup>(39)</sup> 九月一日、妹ノラの婚約者パーク(W. H. Park)と共に、若ランバスが上海から到着した。<sup>(40)</sup> アメリカよりウィルソン(A. W. Wilson)監督とデニー(C. Denny)を迎え、九月一七日に日本宣教部の開始式が行われた。そこで、若ランバスが総理に任命され、南美以神戸教会(現・神戸栄光教会)が設立された。<sup>(41)</sup>

九月二三日、中国に仕事を残していた若ランバスは、神戸から船に乗って長崎経由で上海に向かった。<sup>(42)</sup> 一〇月二日と三日、日本宣教部総理である若ランバス不在のまま、初めての四季会<sup>(43)</sup>が開催された。四季会の二日目、愿太は老ランバスから洗礼を授かり、南メソヂスト監督教会日本伝道開始以来初の受洗者となった。<sup>(44)</sup> 一〇月六日、老ランバスの司式により、娘ノラとパークの結婚式が執り行われた。証人として、上海の総領事ジャーニガン(T. R. Jerigan)が立ち会った。<sup>(45)</sup> パーク医師の留守中、蘇州の病院の面倒を見ていたのは、愿太が老ランバスとの初会見の時に同席していたマーシャルであった。<sup>(46)</sup> 併せて、デュークスとベネットの挙式も行われた。<sup>(47)</sup> その翌日、新婚のパーク夫妻が上海に向け出発すると、来日以来の目の回るような忙しさはようやく一段落した。<sup>(48)</sup> いよいよ、瀬戸内伝道の本格的開始である。<sup>(49)</sup>

まず、一〇月一二日、老ランバスとデュークスは淡路島の岡健太の学校を訪問した。洲本で英

学塾を開いていた岡は、アメリカのカンバーランド長老キリスト教会婦人宣教師ドレナン(A. N. Drennan)から老ランバスのことを聞き、教示を願い出たのである。<sup>(50)</sup> 岡の学校では一二五人の生徒が学んでいた。<sup>(51)</sup> 一〇月二〇日、かねてより受けていた砂本貞吉の招きに応じ、老ランバスは広島に赴くことになり、通訳として愿太が同行した。神戸から岡山までは陸路を進んだが、悪路のため岡山から汽船に乗り換え広島に到着した。<sup>(52)</sup> 当時、外国人の旅行には県庁が発行するパスポート(旅行許可証)が必要で、その取得には数週間かかった。<sup>(53)</sup> 訪問先では地元の警察に届け出なければならなかった。幸運にも、広島県の警部長は愿太と同郷であったため、大いに便宜をはかってもらうことができた。<sup>(54)</sup> 後に、広島に宣教師を置く必要が生じ、デュークス夫妻が赴任した際は、愿太も同行して数ヶ月間共に滞在し、広島での生活を助けている。<sup>(55)</sup>

一月二四日、若ランバスとその家族が中国から神戸に到着した。<sup>(56)</sup> 愿太は、ランバス一家の伝道を助け、ある時は老ランバス、またある時は若ランバスの通訳として、瀬戸内海沿岸を回った。

一二月初め、愿太は砂本と共に、老ランバス、あるいは若ランバスを案内して山口を訪問した。<sup>(57)</sup> 山口県当局から、妻帯者のアメリカ人を英語教師として招聘したいとの連絡を受けたことが訪問の理由であった。当時、南メソヂスト監督教会は西日本各地から英語教師派遣の要請を受けていたが、それに応えられるだけの宣教師を確保できず、せっかくの布教の機会を他の教派に譲らざるを得ない状況にあった。この時も、県知事に面会したにもかかわらず、英語教師の職は長老教会によって占められた。<sup>(58)</sup>

一八八七年春、広島で代弁人(弁護士)をしていた篠原資は、故郷宇和島に帰るため、宇品港から船に乗った。同じ船に淡路島の岡が乗っていた。岡から老ランバスの話を聞いた篠原は、宇

和島に到着するやいなや、英学塾を開いている西村静一郎と相談して、老ランバスに手紙と電報を送り、宇和島来訪を懇願した。<sup>(59)</sup> その要請を「マケドニア・コール」のように感じた老ランバスは、岡と共に宇和島を訪問した。八つの港に寄港しながら二晩以上かけて宇和島に到着したと、老ランバスは記している。<sup>(60)</sup>

このような初期の伝道の模様を愿太は次のように表現している。<sup>(61)</sup> 「博士父子は伝道地の視察として神戸を起点に海を隔てた淡路島を第一に、山陽道の各地を山口、萩等まで旅行されましたが、其都度同行して警察や旅館其他の世話をなし又諸集会に通訳するのが私の役目になって居ったです。当時は未だ山陽鉄道の敷設前で人車か馬車か徒歩の困難時代<sup>ヘママ</sup>でしたから神戸から山口へ行くのは却々尋常<sup>なかなか</sup>の事ではありませんでした」。

広島における老ランバスの伝道の様子を後年、景教研究で名を成した佐伯好郎は次のように語った。<sup>(63)</sup> 「私がまだ少年で、家督相続を捨て上京、英学修行を決意する元となる出来事がありました。老(父)ランバス師は昔の赤い郵便集配達車のような大八車に聖書の一杯入った箱をつけ、それを引いて私の家(古い造り酒屋で本通り商店街に在る)の前の通りなどをよく伝道に來られた。赤い車の横に十字架の書かれた白旗が立ててあったと覚えている。私たちはその人を赤ひげの異人さんが来るよと言っていました。…そのような頃のある日、此方に車を引いて来ると言うので私は親には隠してランバスさんの車に行きました。辻伝道といっしょに聖書を安く売捌いていたからです。とても立派なあごひげがあり、少年の目には見上げるほどの中背で痩せた人であった。私は腕白大将でしたから、聖書を数冊小遣い銭で買い近所の子どもたちに配り、近くのお寺の境内に隠れて読みました。夢中で実に感動しました。…老(父)ランバス師の写真があればも

ういちど見たい」。「J・W・ランバスさんは令息の名声にかくれていられるが、実に偉大な宣教師でした」。佐伯にとって、老ランバスは「信仰生涯の目を開いていただいた恩人」<sup>(64)</sup>であった。

老ランバスが広島に来ていたことを聞きつけた一〇代前半の少年たちが、庄原から二五里（百キロ）もの道のりを歩いて会いに来たこともあった。広島にたどりつくと、老ランバスは既に宮島に去っていたため、さらに宮島まで追いかけて、やっと会えた老ランバスと英語で会話し、一人一人頭を撫でられ、飴や聖書をもらって大変嬉しかったという想い出を少年の一人だった黒田穰は述べている。<sup>(65)</sup>

若ランバスと一緒に淡路島に向かった時のことを後年愿太はこう語っている。<sup>(66)</sup>「嘗て若ランバスと洲本に行かんとして途中海上風波荒く将に乗船沈没せんとし、辛ふじて岩屋町に漂流する事が出来ました。<sup>(67)</sup>西洋人の来着との事にて村民大挙せしに、其中に多数の眼病者を見て、若ランバスは大に驚き、一ヶ月に一回位薬品を携帯して、此等の人々を診察し得ば幸ならんと語られました」。

若ランバスの医療活動を伴った伝道と言えば、宇和島で九八歳になる旧七代藩主伊達宗紀<sup>むねただ</sup>を往診した話が知られている。<sup>(68)</sup>その時の同行者は先の篠原と木下春三<sup>(69)</sup>で、愿太は既に留学のため渡米していた。各種資料から、ランバス父子の通訳として木下の働きが大きかったことがうかがえるが、医師でもあった若ランバスの伝道活動の通訳としては、医者の子に生まれ、兄も評判の医者であった愿太は適任であったろう。日本伝道開始に当たって、愿太のような通訳を得ることのできたランバス父子は実に幸運であった。<sup>(70)</sup>

宇和島伝道の際、ランバス父子はしばしば、宇都宮巴弥氏（旧中昭八）の祖父初代宇都宮莊十

郎の家をベースキャンプにしていた。鉾山屋であるその家には測量、製図用器具が多数あり、まだ幼かった宇都宮氏の父二代目莊十郎の目には、背の高い若ランバスが長い足で歩くと大きなコンパスのように見えた。そこで、「コンパス先生、コンパス先生」と呼んでは「ランバス先生と言いなさい」と父親にたしなめられていたそうである。<sup>(1)</sup>

なお、神戸ではあまり医療活動を行わなかったと言われる若ランバスであるが、神戸における医師としての活動について、次の二つを挙げておきたい。<sup>(2)</sup>まず、一八八七（明治二〇）年六月、神戸在住の一名の有名な医師の依頼を受け、毎週二回、英語で医学を教え始めた。<sup>(3)</sup>また、本務の余暇を利用して、名田病院で内科、外科の診察治療を行うとの広告が八八（明治二一）年四月二五日付けの『神戸又新日報』<sup>（ゆうしん）</sup>に掲載された。

瀬戸内海を船で行き来する以上、愿太も記しているように、台風に遭遇することもあった。若ランバス自身、その経験を次のように書き残している。<sup>(4)</sup>「海は大釜のようにわきかえっていた。風が恐ろしい力で吹いていたので、甲板の上にあるものは何もかも吹き飛ばされ、船自体も真横に傾いて、いつ転覆するかも分からない危険な状態にあった。…夜半に船長は自信をなくして、キャビンボーイを私達のところによこした。少年は両手と両膝で這ってやってきて、船客の中で誰か船長よりも船の操縦にくわしい者はいないか尋ねた。これがパニックへの導火線となり、絨毯をすっかりつかんで顔を床にくっつけていられる日本人はみな、金比羅さんに自分を救ってくれるよう大声で助けを求め始めた。私が船長に送った返答は、『船を全速力で動かして、波の谷間の外側にでているように』ということであった。翌朝明るくなると、空は晴れて太陽は輝き、瀬戸内海は島々にとりかこまれて、まるで天国のように見えた。日本の人達も夜の恐怖はすっか

り忘れて、私の頭の様子を見て大笑いした。理由を尋ねると鏡を見てごらんさいということだった。鏡はなくなってしまうていたが、私は手を頭にやってみて、大変なことになっているのを知った。或る船客が竹の皮に包んだ冷御飯と漬け物の弁当を用意していたのだが、夜の間に私はその中に頭をつっこんでしまっていたのだった。頭を洗って櫛を入れて、にかわのようになった米粒をすつかりとるのに二時間近くもかかった……」。

このように南メソヂスト監督教会初期の瀬戸内伝道を顧みると、ランバス父子に寄せられた日本人の熱い思いに驚かされる。「ここには、現在六人の日本人信徒がいます。中国人一人と私たちをあわせると、日本の南メソヂスト監督教会は二七人になります。宣教の取り組みの歴史の中で、こんな伝道地はこれまでにありませんでした。今世紀の残りの数年間、偉大なキリスト教会が奮闘努力すれば、この国はある日、神のもとに生まれ変わるかも知れません」と、若ランバスは神戸から故国アメリカに発信している。<sup>(75)</sup>しかし、明治中期の日本人が心から求めていたものは本当にキリスト教だったのであるか。一方で、英語教授に忙しく、肝心の聖書を教えていないという批判に対する弁明を、若ランバスたちが本国に書き送っていたのも事実である。<sup>(76)</sup>

ランバス父子は、瀬戸内海沿岸地域の伝道に回るだけでなく、神戸の住居では夜間、読書館を開き、青年たちに英語を教えていた（現・パルモア学院）。愿太はその学校の教師をも務めた。このような多忙な日々は、愿太がアメリカに留学する一八八七（明治二〇）年六月まで続いた。<sup>(77)</sup>ランバス父子の日本語能力について、彼らの日本語教師でもあった愿太は興味深い話を残している。<sup>(78)</sup>「老ランバス先生は遅いが着実な勉強振りで、正確に日本語を習得して往かれたが、少ランバス先生は、所謂才気煥発、どんどん覚えて行かれた代わりに、往々とんだ間違ひもあった。

若い美しい女の人を『別嬪』といふ事を、教へて置いて置いたら、其数日後に、元町か何処かで、彼方から美しい女の人があるのを見られて、『あちらから鉄瓶が来ました。』と云はれた事がある。』。愿太が仙台出身であることを考えると、愿太から日本語を習ったランバス父子の日本語の発音には、神戸を生活の中心としたにもかかわらず、東北弁の響きがあったことだろう。

#### 4 アメリカ留学<sup>(79)</sup>

ランバス一家の通訳やパルモア学院の英語教師を務めるうちに、愿太は次第に自分の勉強不足を感じるようになっていった。男子校創立の計画を持っていた若ランバスから、いずれはその学校の教師にとの話を聞いていたと推定される。若ランバスと相談の末、上海のアメリカ聖公会宣教師ブーン(W. J. Boone)<sup>(80)</sup>一家の帰国に合わせて、ひとまず愿太はサンフランシスコに渡ることになった。一八八七(明治二〇)年六月のことであった。<sup>(81)</sup>

サンフランシスコで、ハリス(M. C. Harris)監督の世話になりながら、愿太は若ランバスからの連絡を待った。ハリスは来日メソヂスト監督教会宣教師の先駆者で、北海道に赴任した最初の宣教師であるが、東京のメソヂスト教会の設立に重要な役割を果たしたことで知られる。愿太とは東京英和学校時代に出会っていたと推測される。愿太の渡米時、ハリスはアメリカ西海岸における日本人宣教師を担当していたため、サンフランシスコに在住していた。<sup>(82)</sup>当時サンフランシスコには福音会という日本人のための組織があり、渡米した青年たちの多くが最初の数週間をここで過ごし、アメリカで生活するための基礎的な知識を得ていた。サンフランシスコ到着後の愿太も、ミズーリ州に移るまでの間、福音会に出入りしていた可能性が高い。<sup>(83)</sup>数カ月後、若ラン

バスの斡旋により、愿太はミズーリ州ファイエットのセントラル・メソヂスト大学に入学した。

セントラル・メソヂスト大学は、一八五三年四月創立、翌年認可を受け、五七年に一四四人の学生と三人の教員によつて授業が開始された初期メソヂスト関係大学のひとつである。<sup>(84)</sup> 愿太の入学に当たっては、若ランバスの強い推薦の他、ランバス父子が来日直後に開いた読書館（現・パルモア学院）に関心を寄せ、費用を援助した南メソヂスト監督教会サウスウエスト・ミズーリ年会所属の牧師パルモア（W. B. Palmore）の尽力もあつたのではないかと思われる。<sup>(85)</sup> ミズーリ州に広大な農場を持ち、生涯独身で通したパルモアは、教会誌 *St. Louis Christian Advocate* の編集を担当しており、世界を漫遊してはその見聞録を書いて掲載していた。神戸にはチャプマン（W. B. Chapman）と共に、八六（明治一九）年に来ている。<sup>(86)</sup> ミズーリ州での愿太とパルモアの交友関係を示す資料は見つかっていないが、パルモアは愿太の留學生活を何らかの形で支えていたのではないだろうか。このように、多くのアメリカ人に助けられ、愿太の留學生活は始まつた。一方、故郷仙台で愿太の留學費用を援助していたのは、親戚の唐物商鈴木作兵衛であつた。<sup>(87)</sup>

日本にいた若ランバスは、妻の病氣のため、一八九〇（明治二三）年一二月に日本を發ち、アメリカに帰国した。留學中の愿太は、アメリカで若ランバスと会う機会もあつたと思われる。

老ランバスは、愿太の留學について、一八八九（明治二三）年九月開催の南メソヂスト監督教会日本宣教師年次總會記録に、次のように記している。<sup>(88)</sup> 「彼〔愿太〕は現在アメリカにいて、ミズーリ州ファイエットのセントラル大学で神學を勉強し、同胞に福音を伝えるべく準備中である」。

## 5 関西学院普通学部教授



一八九四（明治二七）年六月、愿太は文学士（B・A）の学位を得てセントラル・メソヂスト大学を卒業、翌年一月、「神戸を永住の地と定め終生伝道と教育に従事する決心を持て」、日本に帰国した。そして、三月二九日、大河平隆の長女菊井子（一八七八？—一九七三）と神戸で結婚<sup>(91)</sup>、留学中に若ランバスが神戸市の東郊に創立した関西学院普通学部<sup>(92)</sup>の教師となつて英語を教え始めた。当時の関西学院評議員会記録によると、愿太の就任は九五（明治二八）年四月である。ところが、関西学院院主吉岡美国名で兵庫県知事に提出された教員雇入書は同年二月二二日付で、愿太の英語科教師としての雇用は二月一日からと書かれており、数ヶ月のずれが見られる。現存する資料から、関西学院の日本人教師として初めて教員免許状を取得したのが愿太で、それは九五年一〇月のこととなっているので、兵庫県への届け出はその後に行われたのであろう。

実は、それまでは、教員免許を持たない教員数がこれを持つ教員数の二倍を越えても文部大臣の許可を得れば中学校となり得たのであるが、この年一月二〇日の文部省令第一号によって、新規採用教員の資格が強化された。つまり、新規採用者を加え、教員免許状無資格者が有資格者の数を超過する場合、文部大臣の許可が必要となったのだ。愿太の就任は、創立以来各種学校の扱いであった関西学院普通学部が、そのまま各種学校にとどまるか、中学校令に基づく中学校になるかの選択を迫られ、揺れている時期であつた。どちらの道を選ぶにしても、関西学院にとって、正式な教員免許状を持つ愿太の存在価値は大きかった。

一八八九（明治二二）年に、神学部と普通学部によって始められた関西学院は、その時創立わずか六年で、「まだ学校らしい形態を備へて居らず、徹頭徹尾アメリカ式に宣教師が経営してゐた村塾みたやうなものであった。校舎も原田村の茶畑の中に、貧弱な木造本館が建ったばかり。ほ

かに創立当時の見窄らしい木造二棟があり……。教員は主に南メソヂスト派の宣教師で、数名の日本人教員が補佐してゐた。日本中一番月給の安い所なので、よい教員の集まるわけがないが、併し当時を追憶して見ると、日本人教師は豪傑揃ひで、一種高遠な理想を懷き、神の召しにより聖職に在りと信じ、給金など眼中になかったやうだった」<sup>(96)</sup>。

当時の関西学院は九月に始まり六月に終わる学年暦を採用しており、学生数は普通学部五五名、神学部一一名、院長は吉岡美国、神学部長はニュートン (J. C. C. Newton) (休暇中のためデマリー (T. W. B. Demaree) が代行)、普通学部長は愿太が留学していたミズーリ州出身のウエンライト (H. Wainright) が務めていた。<sup>(97)</sup> 前述の評議員会記録によると、愿太の月給は三〇円であった。院長の吉岡は四〇円である。同じ年に松山中学の英語教師をしていた夏目漱石の月給が八〇円だった<sup>(98)</sup>ことを考えると、関西学院の教師は確かに薄給であった。

帰国直後の愿太の名は、「関西学院青年会記録」の中に見出すことができる。<sup>(99)</sup> 一八九五 (明治二八) 年二月二八日午後六時半より開かれた例会で、愿太は「在米所感」というタイトルで英語で報告を行っている。また、教師となつてからの一二月八日午後六時からの例会では、「デクラメーション」というタイトルで話をしている。

英語教師として、愿太が関西学院に果たした最大の貢献は、一八九六 (明治二九) 年に組織された英語会 (ESS の前身) への関わりであろう。英語会は神学部、普通学部の生徒全員をもつて組織されたもので、毎週、または隔週毎の例会で、英語演説、暗唱、討論等の腕を磨き合い、年に一度、公開の大会でその研鑽の結果を披露していた。<sup>(100)</sup> 「英語の関学」の礎を築いたと言われる英語会が、まるで愿太の就任に合わせたかのように組織されたことは注目すべき事実である。

「語学と云ふ点より云へば、殆ど米国人と化しゐたる鈴木愿太<sup>(101)</sup>」は、授業中だけでなく、英語会においても熱心に学生を指導したことだろう。

ところで、南メソヂスト監督教会宣教師の話す英語には、多かれ少なかれ南部訛があったと思われる。後年、関西学院の経営に参加したカナダ・メソヂスト教会宣教師ベーツ(C. J. L. Bates)の次男は、南部訛について次のように書いている。<sup>(102)</sup>「このアメリカ人たちは、両親たちとは違ったアクセントの英語を話しており、私は今でも、南部のアメリカ人宣教師たちは日本語を話すときでも南部訛ではなしていたことを覚えている」。アメリカ南部の大学に留学した日本人教師も、南部訛の英語を身につけて帰って来たことであろう。一方、アメリカ大陸中央部に位置するミズーリ州で長年留学生生活を送った愿太の話す英語は、クリアで訛がなかった。<sup>(103)</sup>このような教師から指導を受けることのできた学生は実に幸運であった。

ところが、愿太にとって関西学院は、必ずしも居心地のいい場所ではなかったようである。愿太が日本を離れている間に、若ランバスは日本を去り、老ランバスは亡くなっていた。<sup>(104)</sup>その上、デュークスも既に宣教師を辞めていて、「私を知って呉れる宣教師は一人も無かった」。<sup>(105)</sup>愿太はランバス一家の身近な存在であり過ぎたのかも知れない。「若し故監督〔若ランバス〕が当時日本に居られたなら、私は確に真の知己を得ただろうと思ふて居ります」。<sup>(106)</sup>それは、上海を出てから神戸に落ち着くまでの多忙を極めた時期に、ランバス一家を最も近くで支え、苦労を共にした愿太ならではの正直な気持ちだったと言えるだろう。愿太の関西学院辞職の日付は、兵庫県知事への届け出によると、一八九七(明治三〇)年一月一五日である。その在職期間は二年にも満たなかった。<sup>(107)</sup>

神戸で伝道と教育に一生を捧げる決意をもってアメリカから帰国したランバス一家の一番弟子の辞職は、周囲に大きな波紋をもたらし、<sup>(108)</sup> 愿太自身、「大に知人の疑惑を招き、米国朋友の感情を害した様に思はれます」と書いている。

しかし、その後も愿太はしばらく神戸に留まっていたようだ。宣教師ウォース (J. M. Worth) 等と協力し、一八九五 (明治二八) 年一〇月、南美以美メソヂスト教会 (一九〇七 (明治四〇) 年より日本メソヂスト神戸教会、四一 (昭和一六) 年より神戸中央教会、四二 (昭和一七) 年より神戸栄光教会)<sup>(109)</sup> にエポース同盟会を組織した愿太は、その会長に就任した。<sup>(110)</sup> 九八 (明治三一) 年九月、日曜学校に大人科を復活することになり、その校長をも務めた。<sup>(111)</sup> 帰国後、神戸の商館で働いていたことがあると愿太は語っているが、それはこの時期であったのかも知れない。九九 (明治三二) 年発行の『関西学院同窓会報』によれば、当時の愿太の住所は「神戸加納町二丁目」であった。<sup>(112)</sup>

一八九七 (明治三〇) 年九月、愿太と入れ替わるように、八年間に及ぶアメリカ留学生生活を終えた西川玉之助が関西学院普通学部教授 (担当・英語、理科) に就任した。愿太にとって西川は、ほぼ同時期にセントラル・メソヂスト大学で学んだ仲間であった。<sup>(113)</sup> 医者の子の次男坊である二人は、共に若ランバスの招きに応じて関西学院の教師となったのである。この他にも、妻が神戸女学院出身であることや、関西学院教師を全うしなかった点等、二人には共通点が多い。愿太が育てた英語会の指導は西川が引き継いだ。<sup>(114)</sup> 西川の就任と同時に、関西学院では「英語発音の革命が実現した」と言われている。<sup>(115)</sup> しかし、この点に関しては、短期間ではあったが、その直前の愿太の貢献を忘れてはならない。二人は共に南部訛のないミズーリ州で留学生生活を送っていたのだ。

やがて、西川も同じ教会のメンバーとなり、<sup>(16)</sup> 愿太との絆は一層強まった。

愿太が、故郷仙台から『河北新報』主筆にとの誘いを受けたのは、ちょうどその頃であった。

## 6 『河北新報』主筆

『河北新報』は、仙台に本社を置く日刊紙で、現在では東北六県をカバーする東北第一の新聞として知られている。創刊以来、同一題号、同一社名、同一経営主体を誇る同紙は、廃刊寸前だった『東北日報』を譲り受けた一力健治郎<sup>(いちりき)</sup>（一八六三―一九二九）が、東北地方の産業と文化の振興を掲げ、一八九七（明治三〇）年一月一七日に創刊した。<sup>(17)</sup>

一力は、愿太の父春山の教え子で、その娘くまぢと結婚していた。<sup>(18)</sup> つまり、愿太の義弟に当たる。一八九九（明治三二）年春、東京の『萬朝報』<sup>(よろず)</sup>が全国新聞のトップを切って英文欄を開設したことに刺激を受け、『河北新報』でも英文欄を新設することになった。その責任者として、一力は義兄の愿太に白羽の矢を立てたのであった。<sup>(19)</sup>

愿太就任の布石となったのは、一八九八（明治三一）年秋に行われた一力の関西新聞事情視察旅行である。旅の途中、一力は神戸に住む義兄の家に一泊し、内地雑居について何か書くよう依頼した。愿太は、仕事の合間に、「手紙でも書くようなつもりで巻紙に筆を染めた」。これを読んだ一力は、愿太を招聘する決意を固めたのだろう。翌年四月一〇日、愿太は『河北新報』主筆に就任した。<sup>(20)</sup>

愿太が巻紙に認めた文章は、「雑居の手引き」というタイトルで、四月三〇日から九月一二日まで百回にわたって『河北新報』に掲載された。当時の明治政府の懸案は、鎖国から開国への

流れの中で諸外国と結んだ不平等条約を改正することであった。そんな中、外国人居留地を廃止して内地を開放（雑居）する改正条約が同年七月一七日に発効され、八月四日から全面実施された。そのタイミングに合わせて連載された愿太の原稿は好評を博した。この中で愿太は、「内外人を隔離しているのは言葉と風俗習慣の違いから互いに遠慮しているからであり、言語を学び風習に慣れることで外国人などという観念を取り払うことが大切であると説」<sup>(122)</sup>いている。

六月二三日、「今般、米国文学士鈴木愿太氏、招きに応じて入社」という社告が掲載された。翌月には、外国との取引上の英文手紙や契約書作成、英文広告文案作成、演説の和英訳などに応じるとの社告も掲載された。だが、この需要はあまり多くはなかったようである。<sup>(123)</sup>

八月一日、在仙の外国人と青年学徒を対象とする地方紙唯一の英文欄が「THE KAHOKU SHIMPO」というタイトルで第二面に登場した。<sup>(124)</sup>「本日より英文欄をもうけ内外人後来の懇親を望む旨を述べたり」という和文記事と共に、週三回掲載することが表明された。<sup>(125)</sup>後年、英文欄を始めた動機を愿太は次のように記している。<sup>(126)</sup>「仙台には、英語の知識を有する人々が極めて多い。若しこれ等の人々が毎日、半段なり一段なりの英語を読み得る機会を得れば、折角得た知識を忘却せずに済み、且これを實際に応用して、その社会的位置を高める事も出来る。それに当市には男女合して一五〇余名の外国人がをり、彼等の国語で社会日々の出来事を知る便宜の無いのを遺憾に思つてゐる。彼等にその一端なりとも知らしむる事は、新聞社の責務で無ければならぬ」。

仙台は、戊辰戦争の際、奥羽越列藩同盟の盟主となった伊達藩の城下町で、明治政府から見れば、賊軍の本拠地であった。会津藩征討の勅命にそむき、奥羽諸侯の盟主となって抵抗した仙台藩の罪は会津藩より重いと言われた。石高を大幅に削減された仙台藩は、帰農政策を進め、北海

道開拓に乗り出し、必死の藩政改革を行った。そんな仙台藩の若い武士の中に、今までに経験したことのない深刻な苦悩からの脱出を求め、ハリストス正教と出会った者が大勢いた。しかし、「火付け・盗賊・人殺・異宗門禁制」の高札がまだ掲げられていた時代である。信徒や求道者たちは捕えられ、訊問を受けた。こうして弾圧・処分を受けた人々の中から、のちに教師となって宮城県<sup>(17)</sup>の教育を推進する人物が輩出したのである。仙台は学都とも呼ばれる。これは、第二高等学校と東北帝国大学が置かれたことが大きな要因であるが、賊軍の扱いを受けた仙台藩士が新しい学問を身に付け、新しい世の中で何とか認められようとした証でもある。したがって、「仙台には、英語の知識を有する人々が極めて多い」という愿太の指摘には説得力があるし、また、『萬朝報』に続いて英文欄を設けるという意気込みを仙台人が持ったことも納得できるのである。その気概は、一力がつけた『河北新報』という新聞名に凝縮されている。戊辰戦争に敗れた東北諸藩は、「白河以北、一山百文」と蔑まれ、「いつも西南諸国の風下に立たされる理不尽さに憤りを抱いていた」のである。<sup>(18)</sup>

ところが、英文欄掲載には大きな苦勞が伴った。当時の社内には英文活字がなく、文選できる工員もいなかったからである。「そこで東北学院の労働会印刷部に依頼して、原文を組んだものを社に持ち帰って紙面に組み込」むという苦肉の策をとった。<sup>(19)</sup>しかし、その内容と体裁に関しては、愿太の努力により、『萬朝報』の英文欄をしのぐほどであると言われた。<sup>(20)</sup>

この他に、愿太は「海外叢談」の連載を開始し、世界事情、主にアメリカの文化、民情、風俗、建築などを紹介した。また、春汀のペンネームで翻訳小説「糸しぐれ」、「火星旅行」を画家柴田耕洋の挿し絵で連載した。<sup>(21)</sup>この春汀の原稿が英文流の横書きであったため、熟練工ですら手を焼

き、工場から苦情が出た。<sup>(132)</sup>さらに、愿太は「東北に埋もれている文学青年に呼びかけ、時代思潮を反映するローカル小説を募集して紙面の明朗化を図った」<sup>(133)</sup>。一九一二（大正元）年七月三十一日からは、「皇室と伊達家」という先帝追慕の特集を連載した。<sup>(134)</sup>

一力は、創業当初から経営に専念し、紙面編集に関しては、大筋を押さえる以外はほとんど義兄の愿太に一任していた。<sup>(135)</sup>愿太の働きにより、当時の『河北新報』の紙面は万華鏡のようだと評された。<sup>(136)</sup>後に愿太自身こう書いている。<sup>(137)</sup>「私はクリーンな新聞を作ろうと努めました。そして、多くの点で成功したと思っています」。その活躍振りを、母校東京英和学校の校友会会報の校友動静欄は次のように伝えている。<sup>(138)</sup>「鈴木愿太氏 米国遊学八年の後帰朝せられ一時関西学院に教鞭を執られしが、数年前より郷里仙台市の河北新報に入り靈筆を揮はる。爾来同紙のモラル、トーン著しく高くなりゆけり」。

この頃の愿太について、親交のあった半沢正二郎（河北診療所眼科医）は、このような思い出を披露している。<sup>(139)</sup>「〔愿太は〕いわゆる八宗兼学の大家のタマゴで、ハイカラさんだったようだ。：英文欄に独特の才能をみせた。時事問題なども取り入れて、とてもリーダーなどには見られない味を出し、当時の青年層からは、おおいにもてはやされ、おかげで受験に役立ったことなど特筆してもよい」。また、当時河北新報社に給仕として入社した山本晃は、和服の着流しや紋付き袴姿が主流だった編集局の中で、愿太だけはいつもキチンとした背広姿の「ハイカラ族」であったと書いている。<sup>(140)</sup>

## 7 仙台美以教会（現・仙台五橋教会）



クリスチャンとしての愿太は、仙台美以教会（一九〇七（明治四〇）年より日本メソヂスト仙台教会、一九四一（昭和一六）年より仙台五橋教会<sup>(14)</sup>）に所属し、仕事の合間を縫って熱心に活動していた。愿太の転入が正式に承認されたのは一九〇一（明治三四）年三月の四季会で、同時に教会委託人に加えられる<sup>(14)</sup>。翌々年三月の四季会では、「エポウス同盟の会長」に選出された<sup>(14)</sup>。牧師が病氣入院中や用事で不在の時は、他の信徒と協力して聖日説教の代行をしたり、教会の「会館建設実行委員会」の発起人になるなど、常にリーダーシップを発揮して活躍した。教会の創立五〇周年に当たっては、『日本メソヂスト仙台教会五十年略史』の編纂委員長を務めている<sup>(14)</sup>。妻の菊井子も熱心なクリスチャンで、夫亡き後の五九（昭和三四）年十一月、日本キリスト教宣教百年記念大会において、信仰歴六三年の表彰を受けている<sup>(14)</sup>。

『仙台五橋教会史（二一五年のあゆみ）』に復刊掲載されている『日本メソヂスト仙台教会五十年略史』の記述を中心に、愿太の活躍を拾い挙げると次のようになる<sup>(14)</sup>。

一九〇一（明治三四）年 四季会で愿太の転入会が承認され、委託人に加えられる。

宣教師 J・G・クリヴランドから相談を受け、第七十七銀行頭取と交渉の末、宣教師館のための土地と建物を購入。

一九〇二（明治三五）年 日曜学校委員。

一九〇三（明治三六）年 委託人、エポウス同盟会長。第二次会堂建築の建築委員に選出される。

一九〇七（明治四〇）年 エポウス同盟長に選出される。

一九〇九（明治四二）年 前年竣工の教会堂修繕のため開かれた役員および有志の相談会にて、修繕費の算段に困り果てた時、「私も二〇円献じます。内一〇円は月賦で」と叫ぶ。

一九一〇（明治四三）年 修繕竣工感謝親睦会の席上、結成が決まった青年共励会の会長に選出される。

一九一三（大正二）年 説教「壁上の怪文字」、「ベタニヤの一夕」、「モーセ論」。

一九一四（大正三）年 幹事。

一九一七（大正六）年 第一回夏期修養会講師を務める。

一九一九（大正八）年 時局に関する演説会にて講演。第二回夏期修養会講師、演題「子を失って」。

一九二〇（大正九）年 第三回夏期修養会講師、演題「教会はわがために何をなせしや」。妻、婦人会会計。

一九二一（大正一〇）年 大成運動組会委員。仙台部より大成運動委員、任地協議員に選出される。<sup>(150)</sup>

第四回夏期修養会講師。

一九二三（大正一二）年 第五回夏期修養会講師、演題「良き地に蒔かれたる種子」、子供デーで講話をする。

説教「宗教の実行力」。

一九二三（大正一二）年 幹事。

一九二四（大正一三）年 他の信徒と協力して、病気の太田虎吉牧師夫妻の代わりを務める。

一九二五（大正一四）年 説教「キリストの復活」他二回。

一九二八（昭和三）年 説教二回。

一九二九（昭和四）年 説教「主よ汝は誰で」。

一九三〇（昭和五）年 説教一回。「会館建設実行委員会」発起人の一人となる。

一九三一（昭和六）年 幹事。

一九三二（昭和七）年 妻、婦人会会長。

一九三三（昭和 八）年 幹事長。妻、婦人会会長。自宅で婦人ミッションより譲与の土地問題につき協議。

米国東亜メソヂスト監督H・ウエルチ博士の講演「キリスト教の諸問題」通訳。

英国の東部ロンドン・キングスリーホール管理者M・L・レスター女史の説教通訳。

共励会デーで説教。妻、福島教会で開催の奥羽南部部会に出席。

一九三四（昭和 九）年 基督教青年会館で行われた元旦早天祈祷会で司会。説教「神の美<sup>ひつじ</sup>を見よ」。ミッション所有土地に関する委員会に出席。第一〇回奥羽南部部会開催に当たり、宿泊所として自宅を提供。感謝日礼拝で講話。

譲渡敷地に関する委員会出席のため上京。

一九三五（昭和一〇）年 土地売渡委員として、東三番丁二番婦人ミッション所有地の仙台鉄道局への売却仮協約締結。四季会にて年会出席信徒総代（奥羽南部代表）に選出<sup>(註)</sup>される。

一九三六（昭和一一）年 幹事、管理人。建築落成式感謝会にて、ウエルチ監督に感謝と送別の挨拶。説教「社会情勢と基督教の指導精神」。

一九三七（昭和一二）年 幹事（議長）。妻、婦人会会長。会員総数四三五名、内現住者一三〇名。

一九四一（昭和一六）年 幹事長（総代）。

愿太の活躍は、所属教会内に限られたものではなかった。『日本メソヂスト教会東部年会記録』

を年毎に追っていくと、信徒として総会代議員、またはその予備員に選出されていたことがわかる。<sup>(152)</sup> 仙台部代表として、東部年会攻勢伝道団役員、拡張伝道委員、任地協議員等にも選出されている他、恩給委員、大成運動委員、教会自給奨励委員、婦人事業委員、行政機構組織に関する研究委員、学生事業委員等にも名を連ねている。<sup>(153)</sup>

メソヂスト監督教会宣教師スワルツ (H. W. Schwartz、一八五七—一九二一、シュワルツとも書く) の執事を務めていた百瀬正賢が一九〇六 (明治三九) 年に、弘前から仙台に移り住んだ時、スワルツは愿太に引き合わせてこう言った。<sup>(154)</sup> 「百瀬さん、私がここで最も良いお友達を紹介する。あなたはその人と深い交際をしなさい。その人は温厚有識の極めて実直な紳士です。今の河北新報主筆鈴木愿太である」。<sup>(155)</sup> スワルツは一八八四 (明治一七) 年の来日直後、東京で愿太に出会っていたと思われる。愿太は、宣教師が胸を張って紹介することのできる、仙台のメソヂスト教会を代表する人物であったと言えるだろう。後年、スワルツの計報を聞いた愿太は、「仙台精神界の恩人日本の親友スワルツ君を偲び今其無きを悼む」という弔電を打っている。<sup>(156)</sup> 百瀬は、愿太の家や一力家を会場として行われていた教会の懇親会で、愿太が得意の落語を披露していたことも紹介している。<sup>(157)</sup>

一方、妻の菊井子は、常に教会の婦人会の中心となつて、教会の会計を助けるためによく働いた。バザーを開くだけでなく、「ぶどう液」を作り、「仙台メソヂスト教会婦人会製造」という三色刷の立派なラベルを貼って、聖餐式用に各地の教会に送ったりもした。生け花が得意だったので、礼拝の時に美しく花を飾るのも菊井子の役割であった。その貢献は、「こうした婦人会の働きを思い出すと、鈴木さんのあの張り切った働き上手なお顔が目にかぶほど、鈴木さんはすべ

での働きの原動力になって下さった方でした」と紹介されている。<sup>(159)</sup>

## 8 詩人サトウハチローとの関係

愿太には、河北新報創業者一力健治郎に嫁いだ妹の他に、もう一人春子という妹がいた。<sup>(160)</sup> 春子は、一八九七（明治三〇）年に、義兄一力の世話により、<sup>(161)</sup>『河北新報』で文芸家庭欄を担当する佐藤<sup>(162)</sup>洽六（一八七四―一九四九）と結婚していた。<sup>(163)</sup> しかし、愿太が主筆に就任した時、洽六は既に退職していた。「不偏不党」を社是とする一力の経営方針に反発したことがその原因だった。<sup>(164)</sup> 洽六は『あゝ玉杯に花うけて』『少年讃歌』等の作品で知られる人気作家佐藤紅緑の本名で、二人の間には九人の子どもが生まれた。<sup>(165)</sup> その長男が八郎（一九〇三―七三）、後に詩人として名を成したサトウハチローである。つまり、愿太はサトウハチローの伯父に当たる。

「サトウハチローは、おかあさんをテーマにした詩を、日本一多く作った詩人」と言われている。<sup>(166)</sup> 母春子は、身長一メートル四〇センチ、体重三五キロ足らずの小柄な女性であった。<sup>(167)</sup>

八郎が生まれた時、洽六は東京に住んでいた。佐藤家の人々については、八郎の異母妹佐藤愛子が書いた小説『血脈』に詳しい。それによると、幼い頃、八郎はお腹が空くと「シュナイダーさんのビスケット」を焼いてと、母にねだっていたようだ。料理上手な春子は、仙台にいた頃、「シュナイダーさんというイギリス人」にお菓子の作り方を習っていたらしい。<sup>(168)</sup> シュナイダー（D. B. Schneider、一八五七―一九三八、シュネーダーとも書く）は、ペンシルベニア州出身のアメリカ・ドイツ改革派教会宣教師である。八七年に仙台に派遣され、九一年に仙台神学校（現・東北学院）の第二代院長に就任、在職三五年の間に、東北学院を小さな私塾から、中学部・高等部・神学部

と整った学制のキリスト教主義教育機関へと大きく発展させた。彼の功績は妻アンナ(Anna)に負うところが大きいと言われている。アンナの組織した婦人会は、伝道の有力な担い手として広範な影響を及ぼした。<sup>(169)</sup> 春子はこのアンナから料理を習っていたのだろう。

やがて、治六は舞台女優三笠万里子と同棲するようになり、そんな父親への反発から八郎の生活は荒れた。一九一六(大正五)年、野球がやりたくて早稲田中学に入学したものの一年で落第、二度目の一年生の時に問題を起こし退学。八月の終わりに関西に行き、九月は京都の中学、一〇月には神戸の中学に通った。しかし、十一月になると大阪の道頓堀あたりをぶらつくようになり、父親の勘当を受け、小笠原の父島の感化院送りとなる。<sup>(170)</sup> 父島から戻った八郎は、立教中学校に入学し、一年生からやり直す<sup>(171)</sup>が、ここも一年ちよつとで退学、結局、落第三回、転校八回、父親から受けた勘当の数一七回に及んだ。<sup>(172)</sup> 八郎が通った学校の中には関西学院の名もある。<sup>(173)</sup> 当時、関西学院中学部の野球部の強さは全国レベルだったので、<sup>(174)</sup> 野球をやったかった八郎が関西学院への転入を考えたのも不思議ではない。しかも、母や母方の親戚はクリスチャンである。関西学院への転入に当たっては、伯父愿太の口添えがあったことも十分考えられる。宮城中学校と東京英和学校で同盟休校事件を起こし、その無鉄砲さから宣教師ヴェールに行く末を案じさせた愿太にとつて、甥の退学や落第は決して他人ごとではなかったはずだ。後年、八郎は当時のことを「野球放浪時代」と表現し、「関西学院のいちご畑の見えるグラウンド」を懐かしんでいる。<sup>(175)</sup>

また、別の機会には、「牧師になりそこねた」。神学部<sup>(176)</sup>に席を置き、わづか三週間で、追いだされた」と語っている。結局、中学を卒業できなかった八郎のため、治六はある中学の卒業免状<sup>(177)</sup>を買い与えた。それを使って、八郎は「立教大学の神学科に進学」したが、そこも三週間しか通

わなかつたようである。本人の弁によると、「ボクとしてはR中学が一番長くいた中学であり、R中学に一番なつかしみを持っている」ということで、日本文芸家協会の文化人名簿にも「立教中学半途退学」と記してもらっていた。<sup>(179)</sup> サトウハチローの作品にはどこことなくキリスト教の匂いが感じられる。「イエス・キリスト」という大変美しい詩も残している。これは、彼が母親から受けた影響のひとつと言えるだろう。<sup>(180)</sup>

夫から離婚を求められた春子は「クリスチャンなので、どんなことがあっても離婚はしない」と言い張るが、結局、四男久を連れ仙台に戻った。<sup>(182)</sup> その頃、一力家の次男次郎は東京で弁護士を開業したところだった。次郎が最初に手がけた民事裁判の弁護が、叔母春子の離婚であったとは皮肉なことである。<sup>(183)</sup>

仙台での春子の生活のため、医者として鈴木の家を継いでいた長兄惇は家を提供した。妹を不憫に思う次兄愿太は味噌や醤油を差し入れた。一力家は生活費を援助した。春子の姉妹は皆、春子に優しくした。<sup>(184)</sup> この様子を佐藤愛子は次のように書いている。<sup>(185)</sup> 「一力家も離婚されたハルの困窮を黙視することは出来なかったから、治六を仇だといいいながら何くれとなくハルの面倒をみた。それをいいことに、治六の息子たちは次々にやっかいをかけにくる。一力家では佐藤と聞くだけで身の毛がよだつ思いであろう」。

一九二五（大正一四）年、春子は仙台で亡くなった。<sup>(186)</sup> 治六は葬式に顔を見せなかった。八郎は、通夜の前に様子を見に来たが、通夜にも葬式にも参列せず、次に姿を現したのは葬式の翌日だった。<sup>(187)</sup> 鈴木家はこんな時も八郎の遊興費の支払いに当たっていた。<sup>(188)</sup> 春子の死後もこの息子たちは世間を騒がせた。四男久は、一力家の門前で心中した。<sup>(189)</sup> 親戚とは言え、自宅前でこのような事件を

起こされ、一力家はさぞ困惑したことであろう。

翌年、八郎は最初の詩集『爪色の雨』を出版した。出版に当たっては、関西学院出身の今東光の尽力があった。<sup>(19)</sup>その叙情的な作風からは、八郎を初めとして佐藤家の兄弟が親戚中に迷惑をかけていたことは、とても想像できない。この頃には、「穏健な性格で熱心なクリスチャン」<sup>(19)</sup>として知られていた愿太も、このような甥っ子たちの品行に心を痛めることが多かったに違いない。

## 9 晩年

一九一八（大正八）年三月、愿太は河北新報社を退社した。<sup>(19)</sup>退社後は、得意の英語を使って仙台を訪れる外国人の通訳をしたり、各界の人に英語を指導したりして過ごした。<sup>(19)</sup>また、俳句をたしなみ、その集まりを河北診療所の眼科医半沢正二郎宅で毎月持った。愿太の俳句は「とても情熱的で、いわゆる『月並み』には決して満足せず、むしろ『新傾向』を愛した」と言われている。<sup>(19)</sup>関西学院とのつながりは、サトウハチローの件を除いては特に見受けられないが、毎年夏を宮城県の高山で過ごしていた<sup>(19)</sup>第四代院長C・J・L・ベーツとは親交があったものと推測される。

一九二一（大正一〇）年、九月二十六日、来日中の若ランバスが横浜の病院で亡くなった。訃報を受けた愿太は、一〇月一日付で、日本メソヂスト神戸教会（現・神戸栄光教会）の日野原善輔牧師宛てに長文の手紙を書き送った。その中にランバス家との関係を詳細に記し、その死を悼んだ。<sup>(19)</sup>また、「故ランバス監督」と題する追想記を『教界時報』に寄せ、次のように結んだ。<sup>(19)</sup>「監督は実に温情春の如き美はしき性質の所有者で何人に接しても露いささかも圭角が無く、初対面の人も百年の知己と同様の待遇を与へられました、日本の真愛者伝道界の偉人故ランバス監督遂に



我国の土とられた。私は故人を追想して遠く三十余年前の青年時代に遡り共に祈り共に働きし其温容を思ひ浮べて転<sup>うた</sup>た愁然、只同監督の私に与へられた恩恵を天父に謝するのみであります」。この中で愿太は、自らの三十数年におよぶ信仰生活を顧みて、ランバス父子から受けた教訓と指導を改めて感謝すると共に、自分を両氏に引き合わせてくれたヴェールに対しても心からの謝意を表している。

一九三六（昭和一一）年秋、南メソヂスト監督教会の日本宣教五〇年を記念する行事が行われた時、愿太は招待を受け来神した。十一月一日午後二時、日本メソヂスト神戸中央教会（現・神戸栄光教会）で開催された祝賀式に参列し、信徒代表として祝辞を述べている。<sup>(198)</sup>同日夜には、日本宣教五十年記念祝賀ページェントとして、ヒルバン(S. M. Hilburn)作の劇「汝往け」が上演された。劇中第二部第三場に、南メソヂスト監督教会初の受洗者として、愿太も老ランバスと共に描かれている。<sup>(199)</sup>また、十一月三日に中央亭で行われた晩餐会にも出席し、ランバス一家との想い出を披露した。その中のひとつに、広島に小さな講義所を設け、愿太が留守番をしていた時のエピソードがある。<sup>(200)</sup>「其時乞食が来て物を請ったので、大に叱ったが、乞食は行きがけの駄賃に大切な靴を盗んでいったので困った。神戸の少ランバス先生に手紙を送って、靴をたのんだら、靴は買って上げるが、乞食には親切にしてやれと教へられた。それ以後私は乞食に親切にしてやる事にしてゐるので、今でも盛んに乞食が来る」。さらに、この時愿太は、小野浜外国人墓地（現・神戸市北区修法ヶ原の神戸市立外国人墓地）の老ランバスの墓にも足を運んでいる。<sup>(201)</sup>

愿太は、長男一郎、長女道子をはじめ九人の子宝に恵まれたが、一八九九（明治三二）年に次女敏子、一九一八（大正七）年に三女俊子、三四（昭和九）年に四女登和子、三五（昭和一〇）

年に一三子、三八（昭和一三）年に長男一郎、六女美和子を亡くしている。<sup>(203)</sup> 愿太が亡くなったのは、太平洋戦争終結直前の八月二日、仙台市中田に疎開中のことであつた。享年七九、死因は老衰だつた。<sup>(204)</sup>

### Ⅲ おわりに

明治期にキリスト教文化に触れ、ランバス父子との出会いにより信仰を得、南メソヂスト監督教会日本伝道の初穂として生涯を送った鈴木愿太は、神戸と仙台のメソヂスト教会で、常に教会運営の中心信徒として活躍した。その存在の大きさは、南メソヂスト監督教会日本宣教五〇年を記念して発行された英文記念誌が、老ランバス、若ランバスに続いて、愿太を三番目に紹介していることから推し量ることができる。愿太の貢献について、『信仰三十年基督教外伝』はこう表現している。<sup>(205)</sup>「仙台市の河北新報の招聘に応じ、主筆兼編集長の任に就き、基督教的精神を以て文筆に携はり、社会教化の為に盡瘁すること二十年。同新聞をして東北に重きをなさしむるに到れり。而して多忙の間論説に講演に機会ある毎に福音の宣伝に努力し、教会のために助力する所少からず」。自分自身の人生を顧みて、晩年の愿太が残したのは、「常に情け深く、慈悲深かつた神に、私は心からの感謝の気持ちをもって向かいます」という言葉であつた。<sup>(206)</sup>

関西学院普通学部教授としての愿太は、二年弱というその勤続期間の短さにもかかわらず、大きな足跡を残した。すなわち、現在のESSの前身とも言える英語会の創設と「英語発音の革命」である。創立以来の伝統とされる「英語の関学」の基礎が、創立者ランバスの一番弟子によって

築かれたことを今一度指摘しておきたい。<sup>(207)</sup>

不完全ながらも、一通りその生涯を追うことができた今、残された大きな課題は、ジャーナリストとしての愿太の働きを明らかにすることである。<sup>(208)</sup>『河北新報』に掲載された記事や、組まれた特集に目を通し、主筆として活躍した愿太が何を伝えようとしていたのか探りたい。愿太が河北新報社に入社した数年後、日本は日露戦争に突入した。当時の新聞各紙は、主戦論、あるいは非戦論を鮮明にした社説や記事を大きく掲載したが、最後まで非戦の立場をとり続けた『萬朝報』が、ついに主戦論の立場を明らかにせざるをえなくなった時、内村鑑三は同紙論客を辞職したと伝えられる。『河北新報』主筆である愿太は、日露戦争に対してどのようなスタンスをとったのだろうか。日露戦争に限らず、その後日本が遭遇した数々の出来事に対して、愿太はどういう姿勢を示したのだろうか。ランバス父子の一番弟子であった愿太の目を通して日本の近代化を見つめることこそ、自分に課せられた次なるテーマであることを認識しつつ、ひとまずペンを置く。

# 【注】

- (1) 日本基督教団神戸栄光教会『神戸栄光教会七十年史』一九五八年、三四頁。
- (2) 『関西学院百年史』通史編Ⅰ、一九九七年、四八頁。
- (3) 前掲書『関西学院百年史』通史編Ⅰ、二〇七頁。
- (4) 関西学院の創立者W・R・ランバス生誕一五〇周年を記念して、二〇〇四年一月一日に行われた第一三回関西学院歴史サロンにおいて、ランバス家の通訳について小玉新次郎名誉教授から質問を受けたことが本稿執筆の直接のきっかけとなった(神田健次「ウォルター・R・ランバスの瀬戸内伝道圏構想」『関西学院史紀要』第一一号、二〇〇五年、二〇〇―二〇一頁)。愿太に目を向けるきっかけを与えてくださった

ただけでなく、執筆の過程で励ましの言葉と助言をくださった小玉先生に改めてお礼申し上げます。

- (5) 河北新報社『宮城県百科事典』一九八二年、五四四頁、警醒社『信仰三十年基督教外伝』一九二二年、二二二頁。『宮城県百科事典』の愿太の項目とその父春山の項目の執筆者（佐藤千代典、村上武）は、河北新報社広報部からいただいた情報によると、既に故人である。なお、本稿執筆に当たり、河北新報社から『河北新報の百年』をご寄贈いただいた他、写真の提供も受けました。ご協力に感謝します。

- (6) ただし、この履歴書が本人の手によるものかどうかは確定できていない。なお、愿太の出生年を一八六五（慶応元）年とする資料は、『宮城県百科事典』、『信仰三十年基督教外伝』、教文館『日本キリスト教歴史大事典』一九八八年等である。また、『日本キリスト教歴史大事典』、手塚晃、国立教育会館編『幕末明治海外渡航者総覧』第一巻、柏書房、一九九二年は、愿太の誕生日を九月九日ではなく、一〇月二八日としている。旧暦の慶応元年九月九日を新暦に直すと一八六五年一〇月二八日になるが、愿太の出生は太陽暦への改暦前であるから、ここでは履歴書の記述通り、慶応二年九月九日とした。

- (7) 鈴木春山に関する記述は、『宮城県百科事典』、五四四頁、角川書店『宮城県姓氏家系大辞典』一九九四年、三六五頁を参照した。後者は出生年を一八一九年としている。前述の履歴書によると、住所は宮城県仙台市木町通り八二番地である。なお、春山の遺稿は、一九〇八（明治四一）年、兄惇により『春山遺稿』としてまとめられた（宮城県立図書館、国立国会図書館所蔵）。

- (8) 宮城県史編纂委員会編『宮城県史』第二九巻、人物史、宮城県史刊行会、一九八六年、一五三頁。なお、東北帝国大学医学部脳外科教授鈴木二郎は惇の孫に当たる。

- (9) 宮城県教育委員会編『宮城県教育百年史』第四巻、資料編、ぎょうせい、一九七九年、一〇〇頁。培根小学校には、愿太より四年遅れて土井晩翠（本名・土井林吉）が入学している（同書第一巻、明治編、一九七六年、七九七―七九八頁）。

- (10) 前掲書『宮城県教育百年史』第一巻、明治編、七九三頁。

- (11) 同書、第一巻、明治編、七九四頁。

- (12) 前掲書『宮城県百科事典』五九四頁。
- (13) 前掲書『宮城県教育百年史』第一卷、明治編、六五一―六五五頁。
- (14) 同書、第四卷、資料編、三六六―三六九頁。
- (15) 前述の履歴書によると、愿太は一八八一（明治一四）年まで宮城中学校で学んでいるので、この同盟休校事件に関わっていないとすれば、それ以前に何らかの理由で退学したことになる。後に、愿太は東京英和学校で同盟休校事件を起こしている。それは、宮城中学校で既に同様の経験をしていたからだとも考えられる。
- (16) 前掲書『宮城県教育百年史』第四卷、資料編、三六六頁。
- (17) 前掲書『信仰三十年基督教外伝』、二三三頁。
- (18) 青山学院『青山学院九十年史』一九六五年、四七頁、年表五六六頁。
- (19) 同書、一四〇頁。
- (20) 青山学院が所蔵する愿太に関する資料については、青山学院資料センターの石川雅美さんにご教示いただきました。ありがとうございました。
- (21) 鈴木愿太「仙台より」『青山学院校友会会報』第一八号、通信欄、一九一三年、三九頁。
- (22) 一八七九（明治一二）年に妻を亡くしたマクレイ (R. S. MacLay) が、五八歳で再婚したのは八二（明治一五）年六月六日である（ジャン・W・克蘭メル編『来日メソヂスト宣教師事典』一九九六年、教文館、一六四―一六五頁）。
- (23) 東京英和学校在籍期間について、前述の履歴書には「明治十七年東京青山英和学校へ入学二ケ年間英学研究」と書かれている。上海渡航が一八八五（明治一八）年秋であるなら、八三（明治一六）年中に東京英和学校に入学していないと二年間学んだことにはならない。逆算すると、仙台で漢学と数学の修業に励んでいたのは八四（明治一七）年まででなく、前年の八三（明治一六）年までと考えた方が良いだろう。「一八八三年に、私は故郷を出て東京に行き、英和学校に入学した」と愿太自身が書いている資料もある (Mickles, J. J.

Jr., "Genta Suzuki, Our First Baptized Christian," *Fiftieth Anniversary Year Book of the Japan Mission of the Methodist Episcopal Church, South and Minutes of the Fiftieth Annual Meeting*, 1936, p. 9)。

- (24) 愿太は、当時の自分を「未だ未信者であった。然も寧ろ乱暴な……」と表現している（鈴木愿太「故ランバス監督」『教界時報』一五七三号、一九二二年、五頁）。

- (25) 鈴木前掲文「故ランバス監督」、五—六頁、前掲書『神戸栄光教会七十年史』、三四頁。

- (26) 上海での生活、老ランバスとの初会見の模様、日本への同行を決意するに至った経緯は、鈴木愿太「私の受洗まで」『近畿教壇』第七六号、一九三六年、四頁を基に、鈴木前掲文「故ランバス監督」、前掲書『神戸栄光教会七十年史』、三四—三六頁を参照した。なお、引用は、特に注記のない限り「私の受洗まで」からである。

- (27) 外務省外交史料館所蔵『明治一八年海外旅券付与表』によれば、愿太の旅券発給は一八八五（明治一八）年九月九日である。上海渡航の時期については、「明治十九年」（「故ランバス監督」）、「明治十八年の春」（「私の受洗まで」）、「明治十九年十月」（「履歴書」）とする説があるが、旅券発給年月日から、八五（明治一八）年秋が正しいと思われる。さらに、同表には愿太の年齢が「十八年一ヶ月」と記されている。履歴書記載の生年月日「慶応二年九月九日」を新暦に直すと「一八六六年一〇月一七日」となるから、八五年九月の旅券発給時、愿太は生後一八年一ヶ月のはずである。この齟齬は、履歴書の生年月日が誤っているか、旅券発給記録の年齢欄の記載間違い（年齢欄の「十」の文字の書き忘れ）から生じたものであろう。なお、愿太が学んだ「英国人ダラスの学校」については現在のところ不明であるが、一九世紀のジャーディン・マセソン商会（怡和洋行）の上海支配人の名がダラス（A. G. Dallas）であった（高橋孝助他編『上海史 巨大都市の形成と人々の営み』東方書店、一九九五年、三七頁、一〇八頁）。愿太が上海で商売を学んでいたことは、Mickles, *op. cit.*, p. 9 参照。

- (28) 老ランバスの記録によれば、「愿太は中国で約六カ月か八カ月間、私たちの教えを受けていた」となっている（Lambuth, J. W., *Records of the Japan Mission, Methodist Episcopal Church, South, from Oct. 1,*

1886 to Sept. 1, 1889, p. 4)。来日が一八八六年七月なので、初会見が同年二月であれば、中国で六カ月間教えを受けていたことになる。

- (29) 老ランバスの日本視察は一八八五年九月（前掲書『関西学院百年史』通史編Ⅰ、四六頁）。その後、ランバス父子は連名で、マクティアー (H. N. McTyre) 監督宛に中国伝道の辞任を願い出る手紙（一八八五年一月二〇日付け）を書いている（小林信雄「解説―ランバス父子の中国伝道辞任の理由について―」『関西学院史紀要』創刊号、一九九一年、二七四―二七九頁）。

- (30) 地元で知られた詩人で、儒学者でもあった父から、孔子の教えを受け、厳しく育てられたと愿太は書いてゐる (Mickles, *op. cit.*, p. 9)。

- (31) イギリスの作家O・ゴールドスミスの小説『ウェークフィールドの牧師』(*The Vicar of Wakefield*, 1766) に出てくる牧師プリムローズのことを指すと思われる。様々な困難を克服して牧師一家が幸福な暮らしを得るというストーリー。出版後非常に多くの版を重ねた。一八世紀のヨーロッパ大陸にも影響を与え、若いゲーテなどが愛読した（平凡社『大百科事典』第二巻、一九八四年、一六六頁）。L・M・オルコットの『若草物語』の中にも、次女ジョーがこの小説を読む場面が出てくるが、それだけ広く読まれていたということであろう。なお、ニュートン (J. C. C. Newton) 第三代院長の通訳を務め、関西学院創立初期に普通学部で教鞭をとっていた菱沼平治は、この小説を授業で用いていたことを書き記している（菱沼平治「学院初代の人々」『文学部回顧』関西学院文学会、一九三二年、二八六頁）。

- (32) C・K・マーシャルの中国名は曹子實（木下隆男「関西学院と『尹致昊日記』」『関西学院史紀要』第七号、二〇〇一年、二六―二七頁）。一八五九年に、老ランバス夫人が幼い若ランバスとその妹と共にアメリカに帰国した時、一緒に連れて行った二人の中国人少年の内の一人。マーシャルはアメリカで教育を受け、一八六九年に中国に戻った (Bray, Francis H., "More about the Lambuths," 『キリスト教主義教育―キリスト教主義教育研究室年報』第八号、一九八〇年、一五八頁)。実は、関西学院普通学部のごく初期の在籍者名簿に、J. Marshall, Soochow, China へ Chas. Marshall, Soochow, China の名があり (*Calendar*

of the Kwansei Gakuin, 1891, p. 7)、『関西学院創立時在籍者名簿』の明治二三年入学欄に、曹錫根と曹福根の名が見られる。この二人は、C・K・マーシャルの息子だと思われる。

(33) 前掲書『神戸栄光教会七十年史』、三五頁。

(34) 愿太は、前掲文「私の受洗まで」には「同年五月中旬頃」と書いているが、前掲文「故ランバス監督」では「明治二十年の六月」としている。老ランバス夫妻と愿太は一八八六（明治一九）年七月に来日しているので、後者は明らかに間違いである。

(35) 前掲書『関西学院百年史』通史編Ⅰ、四六頁。

(36) 神戸港到着の日付は、鈴木前掲文「私の受洗まで」では「六月の十二日」となっているが、七月二五日が正しい（“Shipping Intelligence,” *The Higo News*, July 26, 1886）。なお、中国人少女二人の名は、「キヤンデー、ツアツ」と記載されている（鈴木前掲文「私の受洗まで」）。

(37) 前掲書『関西学院百年史』通史編Ⅰ、七四頁。同書が神戸での最初の住居をデイヴィジョン・ストリートとしているのは、『ジャパン・ディレクトリー 幕末・明治在日外国人・機関名鑑』一八八七（明治二〇）年の Alphabetical List 欄を参考にしたからであろう。しかし、同書の Religious Bodies/Societies 欄には別の住所 (Division Street, Kobe) ではなく、[2, Yama, Kobe] が記載されている。居留地内ではなく、Yama (山) の付く住居を借りることが決められたのは同年一月四日の四季会であるから (Lambuth, J. W., *op. cit.*, p. 7)。<sup>2</sup>これが前年七月の来日当初の住まいであったとは考えられない（八六〈明治一九〉年二月一七日付け『芸備日報』によると、老ランバスは同年二月には山二番に住んでいる）。また、ランバス父子が書いた記録や書簡の中で、デイヴィジョン・ストリートに触れているものは今のところ目にしていない。したがって、『ジャパン・ディレクトリー』だけを根拠に、来日当初の住まいを四七番としていたこれまでの定説を覆して、それをデイヴィジョン・ストリートとするのは証拠不十分だと思われる。

(38) 鈴木前掲文「私の受洗まで」、四頁。なお、鈴木前掲文「故ランバス監督」にある「無事神戸に着くや否や直ちに既に借り置かれた居留地の四十八番に落ち着く事となったです（傍点筆者）」は、印刷ミスか何



かであろう。当時、居留地四八番にはユニオン・チャーチがあった（茂義樹『明治初期神戸伝道とD・C・グリーン』新教出版社、一九八六年、四一―四六頁）。

- (39) 鈴木前掲文「私の受洗まで」には、「其後の落ち附くまでの混雑は実に筆紙に盡されぬ状態で・・・」と表現されている。

- (40) "Shipping Intelligence," *The Hiogo News*, Sept. 13, 1886.

- (41) Lambuth, J. W., *op. cit.*, pp. 2-3. 前掲書『神戸栄光教会七十年史』、六頁。ただし、神戸栄光教会の創立日については、後述の第一回四季会の日とする説、第一回の教会会議が開かれた日とする説もある（『日本キリスト教団 神戸栄光教会百年史』二〇〇五年、八九―九〇頁）。

- (42) "Shipping Intelligence," *The Hiogo News*, Sept. 24, 1886.

- (43) 四季会とは、メソヂスト系の教会で年四回（三カ月毎）開催される巡回の会議（前掲書『日本キリスト教歴史大事典』、六〇六頁）。

- (44) Lambuth, J. W., *op. cit.*, p. 3. 前掲書『神戸栄光教会七十年史』等、愿太の受洗日を一〇月二日とする文献もある。また、愿太が受洗したのは、老ランバスではなくウィルソン監督からとする資料（「私の受洗まで」 Towson, W. E., "The Founding of the Mission and the Pre-Conference Years," *Fiftieth Anniversary Year Book*, p. 1）もあるが、九月一七日に日本宣教部開始式を行ったウィルソン監督は、二三日に若ランバスと共に神戸を発ち中国に向かっている（Lambuth, J. W., *op. cit.*, pp. 2-3）ので、四季会の時に受洗したのであれば老ランバスからであろう。

- (45) *Memoirs of Dr. W. H. Park of Soochow 1882-1927*, 1936, p. 41. ジャーニガンは、後に上海で弁護士になった。パーク一家にとって、生涯を通じて最も親しくしていた中国在住のアメリカ人の友人である。

- (46) *ditto*.

- (47) 二組の結婚については、Lambuth, J. W., *op. cit.*, p. 4 参照。

- (48) "Shipping Intelligence," *The Hiogo News*, Oct. 8, 1886.

- (49) 南メソヂスト監督教会が日本宣教に当たって描いた瀬戸内伝道圏構想については、神田前掲文、一八一—二〇四頁参照。
- (50) 岡健太(一八五八—一九二一)は、後に南メソヂスト監督教会の信徒伝道者となって宣教師を助けた(前掲書『日本キリスト教歴史大事典』、二三八頁、九六七頁)。この訪問に愿太が同行したことを示す資料は今のところ目にしていない。
- (51) Lambuth, J. W., *op. cit.*, p. 4.
- (52) 南美宣教五十年記念運動事務所『南美宣教五十年史』一九三六年、一七一—一八頁。山陽鉄道の神戸—広島間開通は、八年後の一八九四年六月である(神田前掲文、一九〇頁)。サンフランシスコで受洗していた砂本貞吉(一八五六—一九三八)は、老ランバスの支援を受け、広島に女子塾(現・広島女学院)を設立、同時に後の広島流川教会を組織した(前掲書『日本キリスト教歴史大事典』、七二八頁)。初期の広島伝道の様子はLambuth, W. R., "Seven Doors," *New Orleans Christian Advocate*, Sept. 1, 1887 参照。
- (53) 一八八七年にナニー・ゲーンズが来日した時、神戸から広島に行くためのパスポートを取得するのにかかった日数は、アメリカから日本に来るのにかかった日数とはほぼ同じであった(Hilburn, S. M., *Gains Sensei, The Friend-sha*, 1936, p. 36〈佐々木翠訳『ゲーンズ先生』、広島女学院、二〇〇二年、四三頁〉)。
- (54) 迅雷居(村上謙介)「著聞集」『新星』第四号、一九三六年、二七頁。なお、広島県の警部長は、一八八三(明治一六)年三月から藤崎供秀、八七(明治二〇)年一月から池永端であった(「歴代警察部長・警察本部長」広島県警察史編さん委員会編『広島県警察百年史』下巻、広島県警察本部、一九七一年、一〇四五頁)。各府県に警察部長が設置されたのは、一八八一(明治一四)年十一月の太政官通達第九十八号による(高橋雄豺『明治時代の警察部長、明治警察史研究』良書普及会、一九七六年、八頁)。
- (55) 鈴木前掲文「故ランバス監督」、五頁。デュークスの琵琶湖巡回区から広島への移動は、一八八七(明治二〇)年三月三十一日の四季会で承認されている(Lambuth, J. W., *op. cit.*, p. 8)。なお、デュークスが広島に赴任することになった経緯については、Lambuth, W. R., *op. cit.*

- (56) 前掲書『関西学院百年史』通史編Ⅰ、五六頁。
- (57) この時山口を訪問したのは老ランバスとする文献（長久清編『山都宣教五十年』日本メソヂスト山口教会、一九四一年、七頁）と、若ランバスとする文献（前掲書『南美宣教五十年史』、四九頁）がある。
- (58) Lambuth, Daisy, "The Cry from Japan," *New Orleans Christian Advocate*, July 14, 1887. 同誌に掲載されたのは、若ランバスの妻デイジーがテネシー州在住の両親に書き送った同年四月四日付け書簡である。「アメリカでは皆死んでいるの？ 日本人が泣き叫び、救い主を求めているのが聞こえないの？ 私たちを助けるよう伝道局に嘆願してちょうだい」と、デイジーは宣教師不足を激しく訴えている。また、若ランバスも、各地から英語教師を求める声が寄せられていることを伝えている（Lambuth, W. R., *op. cit.*）。山口で英語教師の職を得られなかった事情について、『山都宣教五十年』は「未だ伝道開始の手掛りを得ることが出来なかった」と伝えているのみであるが、山口県（長州藩）側にすれば、仙台藩出身の愿太が関わっている南メソヂスト監督教会より他の教派を選んだのは当然の決断であつたろう。
- (59) 『宇和島中町教会百年史』日本基督教団宇和島中町教会、一九九七年、四五―四七頁、半田一吉訳「日本雑記」『関西学院キリスト教教育史資料Ⅲ ウォルター・ラッセル・ランバス資料』関西学院キリスト教主義教育研究室、一九八〇年、九五―九七頁。
- (60) Lambuth, J. W., "The Cry from Japan," *New Orleans Christian Advocate*, July 14, 1887. 老ランバスの手記は、注（58）の若ランバス夫人の書簡と共に掲載されている。なお、宇和島運輸が一八八五（明治一八）年に運行を開始した宇和島―大阪航路は、宇和島を起点に計一五港に寄港しながら、三日かけて大阪に到着する長旅であつた（前掲書『宇和島中町教会百年史』、三二頁）。
- (61) 鈴木前掲文「故ランバス監督」、五頁。
- (62) 景教は大秦景教とも言い、キリスト教ネストリウス派に対する中国での呼び名。四三一年のエペソ公会議で異端とされ、東方に広まった。六三五年、唐の都長安に伝えられ、太宗の保護下盛んになった。日本にも景教宣教師が渡来したという説もある（平凡社『大百科事典』第四卷、一九八四年、一一二五―一一二六頁、

前掲書『日本キリスト教歴史大事典』、四八二頁。

- (63) 寺田芳徳「J・W・ランバス宣教師の広島地区特に庄原と廿日市の伝道について」関西学院学院史資料室『資料室便り』五号、一九八七年、八―九頁。なお、一八七一年生まれの佐伯が上京したのは、八七年八月のことである（浜本義弘編『佐伯好郎先生年譜』、佐伯好郎伝記刊行会『佐伯好郎遺稿並伝』、一九七〇年、一―四頁）。

- (64) 寺田芳徳「佐伯先生とのめぐり合いを憶う」、前掲書『佐伯好郎遺稿並伝』、一四六六頁。

- (65) 寺田芳徳『日本英学発達史の基礎研究―庄原英学校、萩藩の英学および慶應義塾を中心に―』上巻、溪水社、一九九九年、一二八―一二九頁。老ランバスに会いに行った少年たちは、庄原英学校の生徒たちであった。  
(66) 前掲書『南美宣教五十年史』、九頁。

- (67) この時、どこから淡路島に向かっていたのか不明である。神戸から淡路島までは至近距離なので、海が荒れる中、神戸から出航したとは考えにくい。

- (68) 橋村寿「宇和島中町教会の由来」『資料室便り』第四号、一九八七年、一三頁。伊達宗紀が若ランバスの診察を受けたことは、一八八七（明治二〇）年九月の『伊達春山（宗紀）公御日記』（伊達家事務所蔵）にも記録されている。アメリカ留学中の愿太がその往診の話を聞いた時、宇和島藩主と故郷仙台的伊達家との関係を思い、感無量だったことだろう。

- (69) この時、木下春三はパルモア学院教師（橋村前掲文、一三頁）で、ランバス父子の通訳として、宇和島だけでなく多度津にも同行している（『多度津教会創立二一〇周年記念誌』日本キリスト教団多度津教会、五三頁）。また、勸士として姫路伝道にも力を尽くした（前掲書『南美宣教五十年史』四五頁）。勸士とはメソヂスト教会で信徒の中から挙げられる伝道職である（前掲書『日本キリスト教歴史大事典』三四五頁）。

- (70) 宣教師の通訳の重要性については、「当時の西洋人宣教師が最も必要としてゐて、しかも中々その人を得難かったのは、通訳の役をなすべき日本人であった」として、「格好な学識有る通訳」を得ることができなかったウエンライト（S. H. Wainright）の苦勞がその伝記に記されている（ウエンライト博士伝編纂委

- 員会『ウェンライト博士伝』教文館、一九四〇年、四四―四五頁）。
- (71) 宇都宮巴弥氏から池田裕子宛二〇〇六年一月一日付け書簡。なお、子どもの目には高く見えたのであらうが、実際の若ランバスは小柄で（吉岡美国談「ランバス先生のことゝも」『新星』第五号、関西学院中学部、一九三七年、二三頁）、写真で比べる限り老ランバスの身長も決して高くない。
- (72) 当時、南メソヂスト監督教会が行った神戸地区における女性と子どものための医療活動については、成田静香「ある中国人女性の神戸における医療伝道―金雅妹の前半生―」（関西学院大学人文学会『人文論究』第四八巻第三号、一九九八年、一七四―一八八頁）に詳しい。
- (73) Lambuth, W. R., *op. cit.*
- (74) 半田訳前掲文、八八―八九頁。
- (75) Lambuth, W. R. "From Japan," *New Orleans Christian Advocate*, June, 16, 1887.
- (76) Lambuth, Daisy, "A Glimpse of Japanese Life," *New Orleans Christian Advocate*, Jan. 26, 1888 & Lambuth, W. R. "Brethren, Help Us Now," *New Orleans Christian Advocate*, March 1, 1888.
- (77) 鈴木前掲文「故ランバス監督」、六頁には、一八八八（明治二一）年六月までとなっているが、愿太のアメリカ留学のための旅券発給が八七（明治二〇）年五月二日（外務省外交史料館所蔵『明治二〇年海外旅券付与表』）であるので、ここでは八七（明治二〇）年六月までとした。
- (78) 迅雷居前掲文、二六頁。この中で、老ランバスと共に来日したデュークスについて、「日本語はとうとう物に成らず、字書を作るのだと頑張って居られたが、それも実現しなかった」と愿太は語っている。ランバス父子には日本語の才能があったと考える良いだろう。娘ノラは、父親の日本語能力について、次のように書いている。「父には中国語の書き言葉の知識があったので、自分の所に来た人々と意志を通じ合うことができました。しかし、半年の内に日本語で説教を書き、それを読むことができるようになりました」(Letter of July 31, 1942, from Nora Lambuth Park, Durham, NC, for the Lambuth Day)。一方、「老ランバスは」日本語が下手で『ワタシ行キマスヒロシマへ』といった調子で…』という黒田穰の回顧談も

ある（前掲書『日本英学発達史の基礎研究』上巻一三〇頁）。

- (79) 愿太が若ランバスと相談の結果、留学を決意し、ブーンやハリス監督の世話を受けながら渡航、セントラル・メソヂスト大学に入学する経緯は、鈴木前掲文「故ランバス監督」、六頁を参照した。

- (80) ブーン（一八四六―一九一）は、アメリカ聖公会初代中国主教の息子として上海で生まれ、父の後を継ぎ、自らも中国伝道に生涯を捧げた（*The National Cyclopaedia of American Biography*, Vol. 5, University Microfilms, 1967, p. 16）。

- (81) 愿太のアメリカ留学を一八八八（明治二一）年とする資料（「履歴書」「故ランバス監督」）、および八九（明治二二）年とする資料（『信仰三十年基督教外伝』『日本キリスト教歴史大事典』『幕末明治海外渡航者総覧』）があるが、愿太の海外旅券発給記録から判断すると、八七（明治二〇）年が正しい（注（77）参照）。

- (82) 前掲書『日本キリスト教歴史大事典』、一一四―一一四二頁。ハリス（一八四六―一九二一）がハワイと米国本土西海岸の日本人移民を対象とするメソヂスト監督教会伝道事業の監督を務めたのは、一八八六年から一九〇四年までである。

- (83) 一八七七年から一九一五年頃までサンフランシスコにあった福音会の成立には、美山貫一や、長く中国で活躍したメソヂスト監督教会宣教師オーチス・ギブソン等が関わっていた。全盛期の一八八〇年代後期から九〇年代には、領事館と並ぶ日本の代表的機関であったと言われる（久富節子「文化伝承へのエネルギー―『福音会沿革史料』誕生の背景―」『東洋学園大学紀要』第二二号、二〇〇四年、七五―八三頁）。

- (84) セントラル・メソヂスト大学ホームページ（<http://www.centralmethodist.edu/visitors/heritage.html>）。
- (85) セントラル・メソヂスト大学アーキビストによれば、同大学に愿太の入学書類は残っていないが、入学に当たって若ランバスの推薦があったこと、現地での生活をランバスの家族が援助していたことは間違いないだろうとの話だった（Email of Feb. 23, 2005, from E. Joy Dodson, Central Methodist University, Mo. to Yuko Ikeda）。ランバスの家族および親戚がミズーリ州にいたという確証は得られていないので、愿太の留学生生活をパルモアが支えていた可能性は高いと思われる。

- (86) Wainright, S. H. "Our Recollections of Palmore," *A Special Edition of the Palmore Messenger*, The Palmore Alumni Association and the Palmore Students' Association, 1936, p. 25. パルモアは、後に大分中学校教師として来日するウエンライトとも親しかった。ウエンライトは、セントルイスの医学校を卒業している。
- (87) 河北新報社総務部編『河北新報社長一力健治郎』一九四一年、一一三頁。鈴木作兵衛の経営する唐物商店「稲作」は、「糸作」と共に、仙台における二大商店のひとつであった。なお、作兵衛は後述の河北新報創業者一力健治郎の実父である（注（118）参照）。
- (88) Lambuth, J. W., "The Japan Mission of the M. E. Church, South, U. S. A., "Minutes of the Annual Meeting of the Japan Mission of the Methodist Episcopal Church, South, Third Session, Sept. 1889, p. 23.
- (89) 留学中の記録について、セントラル・メソヂスト大学アーカイブズでは、学位の取得と同窓会誌に掲載された卒業後の勤務先以外の情報は得られなかった（前掲Email）。
- (90) 鈴木前掲文「故ランバス監督」、六頁。
- (91) 前掲書『信仰三十年基督教外伝』、二三二―二三三頁。菊井子の没年に関しては、仙台五橋教会史編纂委員会編『仙台五橋教会史（一一五年のあゆみ）』二〇〇〇年、二〇〇頁による。生年は、教会の婦人会と一緒に活動した女性が、その当時の思い出として、鈴木が一六歳で結婚したことを書いている（同書、二六〇頁）ことから計算した。また、故郷仙台ではなく神戸で結婚したことは、『青山学院校友会会報』第一八号、一九一三年、三九頁による。結婚の地から推測すると、妻菊井子は神戸の学校の出身者である可能性が高い。そこで、神戸女学院に問い合わせたところ、一八九四（明治二七）年五月入学、翌年六月に退学した鈴木（大河平）キクイという人物がいたことが在籍者名簿により確認できたとの回答を史料室の佐伯裕加恵さんからいただいた。佐伯さんのご協力に感謝します。なお、菊井子の旧姓大河平のヨミは「オコヒラ」だと思われる。『磐前県（現・福島県）職員録 明治五年』に大河平隆の名があるとの情報もあるが、これが菊井子の父であるかどうかは未確認である。
- (92) 一八九五（明治二八）年六月二一日、関西学院講堂で第六回評議員会が開催されているが、愿太の雇用

については「去ル明治二八年四、五、六ノ三ヶ月間松井浪八氏ノ代リニ鈴木愿太氏ヲ招聘シタレバ事後承諾ノ件ヲ求ム…」と記録され、改めてモズレー (C. B. Moseley) の動議により愿太を教師として招聘することが決議されている。愿太の前任松井の担当科目は、英訳と地理であった (*Calendar of the Kwansei Gakuin*, 1894-95)。

- (93) 前掲書『関西学院百年史』通史編Ⅰ、二〇七頁。
- (94) 同書、二〇六―二〇七頁。
- (95) 同書、一九八―二〇五頁。
- (96) 西川玉之助「古い時代の関西学院」『関西学院六十年史』、一九四九年、二〇六―二〇七頁。
- (97) *Calendar of the Kwansei Gakuin*, 1894-95. 1) の年を最後に、愿太在職中の *Calendar* が残されていないのは実に残念である。
- (98) 週刊朝日編『値段の明治大正昭和風俗史』朝日新聞社、一九八一年、二〇六頁。
- (99) 『関西学院キリスト教教育史研究資料Ⅰ 関西学院青年会記録』、一八七六年、四一頁、四五頁。
- (100) 関西学院大学英語研究部創部一〇〇周年記念事業委員会『関西学院大学英語研究部 (ESS) 一〇〇年史』一九九八年、一八頁。関西学院に英語会が組織されたことは、松山で開催された南美以教会第六期日本年会 (一九九七 (明治三〇) 年九月二九日～一〇月五日) で報告されている (同記録六八頁)。なお、当時の学生の英語力が極めて優れていたことは、学生が独力で発行していた英語会の機関誌 *The Maya Arashi* により知ることができる (神崎高明『*The Maya Arashi* を読む―原田の森のカレッジ・ペーパー―』『関西学院史紀要』第一一号、二〇〇五年、二〇七―二七六頁)。
- (101) 『開校四十年記念 関西学院史』、一九二九年、三八頁。
- (102) C. J. L. ベーツ Jr. 「神戸、関学そして父」『クレセント』第三巻第二号、一九七九年、一一一頁。
- (103) 広大なアメリカでは、その中央部に位置する州で話されている英語が標準語であると言われている。ミシシッピ州出身で、ご自身も訛で苦勞された経験をお持ちのジョン・サウス・ルイス (John South



Lewis) さんの話によると、ミズーリ州は南部ではなく、オハイオ州などと共にアメリカ中西部に位置しており、そこで数年間留学生生活を送った愿太は、ニュートラルな英語のアクセントを関西学院に持ち帰り、紹介したと思われるとのことであった。アメリカ留学以前の愿太の英語環境も、南部訛とは縁遠い（東京英和学校はメソヂスト監督教会の学校であるし、上海で通っていたのは英国人の学校である。ランバス一家と親しくなっただけは、ニューヨーク州出身の老ランバス夫人が英語教師であった）。

- (104) 若ランバスの離日は一八九〇（明治二三）年十二月、老ランバスの死去は九二（明治二五）年四月二八日であった（『関西学院事典』二〇〇一年、三二一―三二三頁）。老ランバスの妻メアリーは、夫の死後しばらくしてから休暇を取りアメリカに帰っていたが、九五年夏、再来日、神戸で愿太と再会したと思われる。
- (105) 鈴木前掲文「故ランバス監督」、六頁。デュークスは、一八九三（明治二六）年にミッシオンを離れている（前掲書『来日メソヂスト宣教師事典』、七二頁）。その理由と経緯については、別の機会にまとめたいと考えているが、愿太にとってはかなりショックなものであったと推察される。

- (106) 鈴木前掲文「故ランバス監督」、六頁。

- (107) 前掲書『開校四十年記念 関西学院史』巻末の旧教職員表には、愿太の在職期間は九五（明治二八）年九月から九七（明治三〇）年十二月までと記されているが、現存する資料から総合的に判断すると、九五（明治二八）年四月から九七（明治三〇）年一月までの一年一〇カ月であったと思われる。

- (108) 鈴木前掲文「故ランバス監督」、六頁。

- (109) 前掲書『日本基督教団 神戸栄光教会百年史』年表。

- (110) 同書、一〇五―一〇六頁。エポース同盟会とは、メソヂスト教会の青年会のこと、メソヂストの祖ジョン・ウエスレーの出生地にちなんで名付けられた（前掲書『仙台五橋教会（一一五年のあゆみ）』、一一一頁）。

- (111) 前掲書『神戸栄光教会七十年史』、四八頁。

- (112) 迅雷居前掲文、二七頁。

- (113) 『関西学院同窓会報』第一号、一八九九年、一四頁。九八（明治三一）年十二月現在の住所が掲載されている。

- (114) 前掲書『ウエンライト博士伝』、一一五頁。
- (115) 中村賢二郎「原田の森の人々」『関西学院六十年史』、一九四九年、二二三頁。
- (116) 西川が「信仰告白をして入会した」のは九八（明治三一）年六月一二日である（前掲書『神戸栄光教会七十年史』、四八頁）。
- (117) 平凡社『大百科事典』第三卷、一九八四年、六〇六頁。
- (118) 前掲書『河北新報社長一力健治郎』、一一四頁。一力健治郎は唐物商鈴木作兵衛の四男として生まれ、隣家の茶商一力家を継いだ。同姓であることからわかるように、愿太とはもとと親戚であった。その死去に際して、土井晩翠が贈った詩「一力健治郎を弔ふ」の一節「妻ありて 子ありて かくて二高生」は有名である（前掲書『河北新報の百年』、一八三頁）。
- (119) 『萬朝報』は、一八九二（明治二五）年一月、黒岩涙香（周六）によって創刊された新聞。編集要領は（一）に簡単、二に明瞭、三に痛快で、小型四頁の紙面に盛り込まれた多様な雑報記事、黒岩の翻案探偵小説の連載などを売り物にした。論客として、内村鑑三、幸徳秋水、堺利彦らが活躍したが、大正中期以降衰退の道をたどり、一九四〇（昭和一五）年一〇月、『東京毎夕新聞』に吸収合併された（平凡社『大百科事典』第一五卷、一九八五年、二六六頁）。
- (120) 前掲書『河北新報の七十年』、二七頁。
- (121) 前掲書『河北新報の百年』、八〇七頁。なお、仙台における愿太の住所は、当初「仙台北一番丁」（『関西学院同窓会報』第三号、一九〇〇年、二三頁）であったが、後に「仙台支倉通四十九」（『関西学院院友会『関西文壇』第二号、一九〇七年、一〇六頁、および第六号、一九〇九年、六一頁）に移り、さらに「仙台市上杉山通」（『日本メソヂスト教会第十一回東部年会記録』一九一八年、一四四頁）、「仙台市北三番丁三一番地」（前掲書『信仰三十年基督教外伝』一九二一年、二三三頁、『日本メソヂスト教会第貳拾八回東部年会記録』一九三五年、二二二頁）に移っている。
- (122) 前掲書『河北新報の百年』、五七―五八頁。

## 南メソヂスト監督教会日本伝道の初穂、鈴木愿太の生涯

- (123) 同書、六〇頁。
- (124) 同書、五七頁。
- (125) 同書、五九頁。
- (126) 同書、五九頁。
- (127) 前掲書『宮城県教育百年史』第一卷、明治編、八一―八八頁。
- (128) 前掲書『河北新報の百年』、三頁。
- (129) 同書、五九頁。
- (130) 前掲書『河北新報の七十年』、二七頁。
- (131) 同書、二七頁。
- (132) 同書、二七頁。
- (133) 同書、二七頁。
- (134) 前掲書『河北新報の百年』、六六九頁、八一〇頁。
- (135) 前掲書『河北新報の七十年』、五二頁。
- (136) 同書、二七頁。
- (137) Mickle, *op. cit.*, p. 9.
- (138) 『青山学院校友會會報』第五号、一九〇四年七月、二二頁。
- (139) 前掲書『河北新報の百年』、六〇頁。
- (140) 同書、四九頁。山本は、愿太と同じ年に河北新報社に入社し、二〇年間勤務した（河北新報社編輯局内親交會編『一力健治郎』一九二九年、五頁）。
- (141) 前掲書『日本キリスト教歴史大事典』七九四―七九五頁。
- (142) メソヂスト教会の教会伝統によると、受洗と教会「入会」とは別である。受洗志願者がバプテスマを領し、そのあと試中こころもちゅうの者（プロベンシヨナル）の期間約六ヶ月を経て「入会」手続きをとる。他教会からの転入

者も入会手続の議を踏む（前掲書『仙台五橋教会（一一五年のあゆみ）』、八七頁）。

- (143) 前掲書『仙台五橋教会（一一五年のあゆみ）』、二九三頁。「委託人」とは、教会が活動・使用する不動産（敷地・会堂など）および所有する動産を管理、保管する役員のこと。のちの「管理人」。中央の監督局と直結の意味があった（同書、一一一頁）。

- (144) 同書、二九四頁。この時の四季会で、一力の転入会も承認されている。

- (145) 同書、一〇一頁、一〇四頁。

- (146) 同書、三一八頁。

- (147) 同書、一二九頁。委員長として愿太が「編集後記」を書いている。

- (148) 市川忠彦編『日本キリスト教宣教百年を記念して―宣教百年記念大会記録一八五九―一九五九―』、日本基督教協議会、一九六〇年、二二五頁。

- (149) 本文と巻末の年表の記述が合わない場合は、本文の記述を採用した。なお、本文には昭和一〇年が二度、登場する（一〇七頁と一〇九頁）。ところが、昭和九年の記述が見当たらないので、最初に出てくる昭和一〇年一月一日を昭和九年一月一日と読み替えた。

- (150) 大成運動とは、北米メソヂスト教会の海外伝道百年祝賀会に関連して計画された日本教化を目的とする日本メソヂスト教会の百年記念前進運動で、一九一八（大正七）年の第四回総会で承認され、全国的に活発な運動を展開した（前掲書『日本キリスト教歴史大事典』、八二三頁）。

- (151) 愿太は信徒総代に選出されたが、一九三五（昭和一〇）年一〇月一〇日から一六日にかけて東京牛込教会で開催された日本メソヂスト教会第八回総会には欠席している（『日本メソヂスト教会第八回総会記録』、一四頁、二九頁）。欠席の理由は、娘一三子が九月二八日に逝去した（前掲書『仙台五橋教会（一一五年のあゆみ）』、一一〇頁）ためであろう。

- (152) 第一回総会代議員（信徒予備員）、第二回総会代議員（信徒代議員）、第四回総会代議員（信徒予備員）、第四回総会代議員（信徒予備員）、第八回総会代議員（信徒代議員）。

- (153) 東部年会攻勢伝道団役員(一九一七(大正六)年)、拡張伝道委員(一九一八(大正七)―一二二(大正一〇)年)、任地協議員(一九二〇(大正九)年)、恩給委員(一九二〇(大正九)年)、大成運動委員(一九二〇(大正九)年)、教会自給奨励委員(一九二一(大正一〇)年)、婦人事業委員(四年間継続委員)(一九二四(大正一三)年)、行政機構組織に関する研究委員(一九三五(昭和一〇)年)、学生事業委員(四年間継続委員)(一九三六(昭和一一)年)。
- (154) 百瀬正賢「思い出二つ三つ」前掲書『仙台五橋教会(一一五年のあゆみ)』、一二二頁。
- (155) 前掲書『来日メソヂスト宣教師事典』、二五七頁。
- (156) 『教界時報』一五八六号、一九二三年、八頁。
- (157) 百瀬前掲文、一二二頁。
- (158) 日本メソヂスト仙台教会は、一九〇七(明治四〇)年十一月以降、仙台部(のちの奥羽南部)唯一の自給教会であった(前掲書『仙台五橋教会(一一五年のあゆみ)』、二九七頁)。
- (159) 石田貞「あの頃の思い出」前掲書『仙台五橋教会(一一五年のあゆみ)』、二五九―二六〇頁。石田の文章に出てくる、婦人会の中心人物鈴木が菊井子を指すと判断した理由は次の三つである。まず、石田が仙台の教会に通い始めた時期が菊井子が婦人会会長を務めていた昭和の初めであること、次に、鈴木結婚年齢が一六歳であったと書かれていること、さらに、一九七三年という菊井子の没年から、夫とは年齢差があつたと推測されることである。前述したように、菊井子は神戸女学院在学中に愿太と結婚している。石田によれば、菊井子は晩年仙台を離れ、東京で生活したようだ。なお、菊井子たちの行ったバザーは仙台におけるバザーの元祖(同書、九九頁)で、「ぶどう液」の製造・販売は仙台の教会で初めての試み(同書、一〇一頁)であつた。
- (160) 前掲書『信仰三十年基督教外伝』、一二三二頁。
- (161) 前掲書『宮城県百科事典』、四二〇頁。
- (162) 前掲書『河北新報の七十年』、二六頁。

- (163) 「佐藤紅緑年譜」尾崎秀樹他監修『少年小説大系』第一六巻、三一書房、一九九二年、四八六頁。
- (164) 前掲書『宮城県百科事典』、四二〇頁。
- (165) 八郎自身は、「かあさんは十一人の子どもを生ましました」と書いている(サトウハチロー『サトウハチロー、落第坊主』、日本図書センター、一九九二年、四六頁)。
- (166) 長田暁二「天国におられるおやじさんに」長田暁二他『サトウハチローの心』佼成出版社、二〇〇二年、八頁。
- (167) サトウ前掲書、四六頁。
- (168) 佐藤愛子『血脈』上、文藝春秋(文春文庫)、二〇〇五年、六八頁。
- (169) 前掲書『日本キリスト教歴史大事典』、六六三頁。
- (170) 宮中雲子『うたうヒポポタマス』、主婦の友社、一九八三年、五一頁。
- (171) 同書、六二頁。
- (172) サトウ前掲書、四〇頁。
- (173) 「サトウハチロー年譜」(長田他前掲書)、根本正義「サトウハチロー年譜」尾崎秀樹他監修『少年小説大系』第二二巻、三一書房、一九九六年。根本の年譜によると、八郎は早稲田中学落第後、関西学院、京都中学、藤沢中学、竜ヶ崎中学、作新学院、下野中学、立教中学等を転々とした。八郎自身は、その中学に対して悪いからという理由で、これらの学校名を明かさなかった(宮中前掲書、八五頁)。なお、関西学院における在籍については、『関西学院中学部退学生学籍簿』に八郎の名が見当たらないため、その在籍期間の確認はできないが、転校回数が多さから考えて、ごく短期間であったと思われる。
- (174) 一九一五(大正四)年、朝日新聞社主催により、第一回全国中等学校優勝野球大会が開催された。関西学院は、第二回大会に兵庫県代表として出場、第三回大会では準優勝、第六回大会では優勝している(米田満『関西学院スポーツ史話』神戸・原田の森篇)、関西学院大学体育会、二〇〇三年、一一一―一二四頁、二一〇―二二二頁)。
- (175) サトウ前掲書、六七頁。

- (176) サトウ記念館編『ハチロー八百面相』、一九八四年、四頁。
- (177) 宮中前掲書、八五頁。
- (178) サトウ前掲書、四〇頁。
- (179) サトウ前掲書、四〇頁、宮中前掲書、八五頁。八郎は立教中学のことをしきりに懐かしがっていたが、学校に八郎の在籍記録は残っていないようである（玉川しんめい『ぼくは浅草の不良少年―実録サトウ・ハチロー伝』新装版、作品社、二〇〇五年、五九頁）。
- (180) 実は、父治六も二年足らず弘前の東奥義塾で学んでいる（佐藤紅緑年譜「尾崎他前掲書、第一六卷、四八五頁」）他、植村正久に師事していたこともある（宮中前掲書、一八頁）ので、キリスト教と無縁ではない。
- (181) 佐藤前掲書、上三三一頁。春子が産んだ九人の子どもの内、離婚時点で生存していたのは、長男八郎、次男節、三男弥、四男久の四人であった。
- (182) 同書、上四一四頁。
- (183) 宮中前掲書、八九頁。
- (184) 宮中前掲書、八九―九〇頁。
- (185) 佐藤前掲書、上六二八頁。
- (186) 宮中前掲書、一〇二頁。母春子の死を一九二二（大正一一）年とするサトウハチローの年譜もある（尾崎他前掲書、第二一巻、六五七頁）。
- (187) 佐藤前掲書、上三七三―三七八頁。春子はクリスチャンであったが、葬式は、実家である鈴木家で仏式で執り行われたようである（宮中前掲書、一〇二頁）。
- (188) 宮中前掲書、一〇二頁。
- (189) 佐藤前掲書、上三一―一頁、上六二七頁。
- (190) 同書、上三八〇頁、宮中前掲書、一〇七頁。今東光は、本郷時代から浅草のペラゴロに至るまで、サトウハチローと同じグループに所属していた（玉川前掲書、九四頁）。ペラゴロとは、浅草オペラの「ペラ」

にフランス語のジゴロの「ゴロ」を会わせたもので、名付け親は小生夢坊等文芸アナキストの一団だと言われている。オペラ役者の騎士を自認しながら、次第に地元の博徒や無頼漢などと対抗する厄介者の集団になっていった（同書、一〇二―一〇四頁）。

(191) 前掲書『宮城県百科事典』、五四四頁。

(192) 「略年表」前掲書『河北新報の七十年』、一九七頁。

(193) 前掲書『宮城県百科事典』、五四四頁。

(194) 前掲書『河北新報の百年』、六〇頁。

(195) 宮城県の高山（現・宮城郡七ヶ浜町花渕浜の高山国際村）は、宣教師が開発した避暑地で、関西学院第四代院長ベーツは、毎年夏をここで過ごしていた。仙台から仙石線で一五分の多賀城駅からバスで三〇分の所に位置する。詳細は、池田裕子「ベーツ第四代院長の手紙と写真と油彩画―高山国際村（宮城県）での調査―」『学院史編纂室便り』一六号、二〇〇二年、二一―六頁参照のこと。

(196) 前掲書『神戸栄光教会七十年史』、三六頁。神戸栄光教会にこの手紙は残っていないそうである。

(197) 鈴木前掲文「故ランバス監督」、六頁。

(198) 「米国南美以教会日本宣教五十年祝賀式次第」。

(199) 「汝往け」プログラムより。

(200) 迅雷居前掲文、二六―二七頁。

(201) 愿太が老ランバスの墓前に立っている写真が『写真による神戸栄光教会八十年略史』写真頁の八枚目に掲載されている。

(202) 前掲書『信仰三十年基督教外伝』、二二三頁。

(203) 愿太の子どもたちの死亡記録は、「仙台五橋教会年表」前掲書『仙台五橋教会史（二一五年の歩み）』から拾い出したものである。ただし、一三子の逝去に関しては同書本文一一〇頁による。

(204) 前掲書『宮城県百科事典』、五四四頁、前掲書『河北新報の百年』、七九一頁。他の文献では、愿太の没年



は不明とされていることが多い。

(205) 前掲書『信仰三十年基督教外伝』、二二二頁。

(206) Mickle, *op. cit.*, p. 9.

(207) そんな愿太に気持ち良く働ける場を関西学院が提供できなかったことを知って、まさに暗澹たる思いであった。

(208) 残念ながら、本稿では家庭人としての愿太についてほとんど言及することができなかった。もし、ご遺族の方と連絡が取れたら、家庭内における愿太の姿やその家族のことをお尋ねしたい。日記や写真や書簡類が残されていれば、ぜひ許可を得て拝見したいと思う。また、実際に仙台を訪問することなく本稿を執筆せざるをえなかったことは、最大の心残りのひとつである。